

松尾周子

Kaneko Matsuo

わたし
の小さな
たより



筒井書房

松尾さんの汀

鈴木 五郎

改めて“みぎわ会だより”を読んでみて感じたことが二つある。一つは、この便りが“みぎわ会”は、どんな老人のケアを目ざしているのかということを利用者と家族、地域へ伝える大切な役割を持っていることである。

巻頭の松尾さんの言葉は、施設の建設のこともあれば、いろいろな人との出会いや季節の話題もある。しかし、そこを貫いているのは、松尾さんの老人福祉にかける愛情ゆたかな想いである。この巻頭のことばの中から感じる安心感が何よりも得難い。たぶんこれを読んだ家族や地域からの反応は思うようには返ってこなかったと思う。しかし、安心という目に見えない反響は計り知れないものがあったのではないだろうか。

もう一つ感じたことは、この便りは松尾さんが七六歳から八〇歳にかけての施設長職を務めた最後の時期の執筆になっていることである。若い時からご苦労されて、医師として施設長として、真一文に歩んできた道の中で、松尾さん自身が高齢者になって、ふっと立ち止まり感じたままを記した貴重な記録になっている。

老人ホームでも企業でも、トップの純粋な意志が見える組織は生き生きとしている。みぎわ園は、みんなが松尾さんの汀を求めて集まってきているところである。みんなのこころの拠り所として、これからも長く巻頭のことばを書きつづけてほしいものである。

はしがき

昭和四四年（一九六九年）に、みぎわ園を開設してからは、早く入所者に向けた施設内情報誌を作りたいと希っていました。

漸く昭和四七年に「みぎわだより」の創刊号が生まれましたが、きちんと月刊になったのは昭和五二年（一九七七年）六月以来です。

昭和五六年四月には軽費老人ホーム「いずみ寮」が併設され、昭和六三年二月にはデイサービスセンター「ナオミ館」が開設しました。そして三者それぞれで施設たよりを発行してきましたが、平成三年四月（一九九一年）からは、全施設を総合した「みぎわ会だより」として新しくスタートすることになりました。

読者は施設利用者から家族、ボランティアの方々、全国の友人、関係公的機関へと拡がっています。毎月五七〇部（B4用紙八〇一〇頁）を送る現状になっています。スタイルは創刊以来一貫して手作り・手書きの素朴さにこだわっていました。

いつも読者のみなさまに伝えたいこと・聞いていただきたいことは山のようにあるのですけれど、誰かのプライバシーにふれたり、施設の理解を曲げはしないかと心配が生まれてくることもあります。毎月の巻頭のご挨拶はそういう中であたりさわりなく本当のことをお伝えしたい気持ちを誌面は

施設の小さな窓と意識して、私からあなたへの姿勢で一生懸命に書いてきました。

時々、思いがけぬ方から「毎月楽しんで読んでいますよ」とか、「一度まとめてみたら」とのお声をいただきます。ついうれしくなり、昨秋満八〇歳という齢をいただきましたことを機に何とか一冊にしたいと思いました。

この度も、また、愛読者(?)の一人、鈴木五郎様(前全国社会福祉協議会事務局長)が、祝・発刊の花束を暖かい文字にして下さいました。大変うれしく勇気づけていただきました。

心よりお礼を申し上げ、よろこびを込めて発刊のことばいたします。

新しいおたより

全く静かで動かないと感じるこの大地が、一時も休まず東から西へぐるぐるまわっている地球なのだと、みんな知っていることです。

神様が、おつくり下さった、ふしぎなありがたい自然です。そのいのちの中で、冬は静かに去りました。そしてまちがいなく、暖かい春がニコニコして訪れてきました。

何もかも、日に、日に変わり、新しくしていただいているのですね。

四月は私たちの世界では、新年度と定められています。「みぎわだより」も、新しい姿に変わることになりました。十何年もつづいてきた、暖かい、素朴な手書きのたよりでしたが、新年度から、「いずみだより」、「ナオミ館だより」と一つになって『みぎわ会だより』になります。

みぎわ会という、大きな一つの屋根の下にある三施設のニュースがみんないっしょにまとめられて、みなさまに届けられます。二〇〇人以上の施設利用者、七〇人の職員、そしてみなさまの家族やふる里の方々にも送ります。いつ、どこでどんなことがあったか。どういうプログラムがあるのか。こういう花が咲きましたよ、〇〇さんには、赤ちゃんが生まれましたよ。△△さんが新しく来られましたよ、など、など、沢山のニュースが山盛りです。

毎日、三〇人の人に出逢い、話をすると言われます。おたがいに声を出して「こんにちは」とか、もし名前を忘れていても「あなたどなた（誰）でしたかしら、お元気ですか？」とえんりよなく話し合いましょう。いつか、順々にみなさんのお顔や、名前も、誌面に登場するはずです。また、どんどんお声も寄せて下さい。すみから、すみまで、くり返し読んで下さい。そのうちこの「たより」が、みんなの心と生活をつなぐやさしいそよ風になり、いろいろの声をサラサラ流してゆく小川の水になるでしょう。

『みぎわ会だより』の成長を心から祈っています。

ももいろの羽を帽子にイースター 青 邨

春の山

どちらを見ても「山」のこの辺りです。

青葉、若葉が湧き上がるように燃える姿は、朝毎に新しく、感動的な美しさです。

『山わらう』という春の季語があります。冬の季語『山眠る』につづく春の山の「わらい」には自然の、大きく、暖かく、不動の力がたたえられています。

さあ、春だよ、のぞみを持つんだよ、ちゃんと背を伸ばすのだよ、と語りかけられる声が聞こえますね。

よろこんで、頭を上げてうたいましょう。

『われ、山にむかいて目をあぐ

わがたすけは、いずこより来たるや

わがたすけは、天地を創り給える主より来たる』

詩篇一二一篇一～二節

いずみ寮十年誌発刊される

B 6 判、二〇六頁

一九九一年三月二〇日発行

四月五日には「いずみ寮開設十年記念式典」が開かれましたが、それに先立ち三月に「十年誌」が発刊されました。準備、編集、校正など半年以上経ての発行となりました。祝辞をいただいた先生方、本誌でも表紙を飾っていただいた岡澤先生、誠に「本づくり」を担っていただいた筒井書房様をはじめ、ご協力いただいたみなさま、ありがとうございました。

いずみ寮十年誌

発刊にあたって 祝辞

〔第一部〕 いずみ寮十年の歩み 利用者の十年 施設、設備の沿革 施設サービス、処遇 地域交流 座談会「いずみ寮十年を振り返る」

〔第二部〕 入寮者及び家族の声

〔第三部〕 いずみ句会句集 資料 入退寮者の状況、利用者負担金の状況、変遷 職員動態

「いずみだより」 新聞掲載記事 あとがき

長寿、その喜、悲

「東大の教授から電話です」との声に、恥ずかしながら、少し脈が高くなるように感じ、食堂から事務室へ急ぎました。「はじめてお電話をいたします。私は、東大法学部教授〇〇ですが……」と、いかにも学者らしいもの静かな話しかけです。

話の内容は、この教授がかかわっておられるある学会誌に小論文をという求めです。今年の年報を『高齢社会で活躍している女性たちの『地方自治』への声』をテーマにしようとされ、様々なルートを経て、私の名に辿りつかれたということです。紹介者の中に全国老施協の先輩の先生のお名前もありました。

「どれくらい書けばよろしいのでしょうか」と私は問いました。「二〇〇字詰め六〇枚ですが」一瞬、私の心の中に「迷い」がよぎりましたが、「先生、お話がありますので、私は今秋七七歳になります。三年前より、眼が悪く左片眼でのよみかきです。一二〇〇〇字の原稿は、大変疲れると思いますので……」と断りました。

この二、三年「しんどいな」と思いながら、つついはつきり断れず、自分も苦しんだり、まわりへも迷惑をかけたこともあります。珍しく晴れ渡った初夏の空を仰いで、さわやかな気持ち

でした。そして、老いに伴う喜び、悲しさを思いました。

『神よ、変えることのできないものは

それを受け容れるだけの心の落ちつきを与え給え

変えることのできるものについては

それを変えただけの勇気を与え給え

そして、変えることのできるものと、できないものを

見分ける知恵を授け給え』

一八世紀の敬虔主義者ルター派神学者

フリードリッヒ・C・フォンエティンガー

「メリハリ」と「これが出る」

- 第一条 健康なからだをつくろう
- 第二条 病気の早期発見と予防につとめよう
- 第三条 事故防止に心がけよう
- 第四条 メリハリのある毎日を送ろう
- 第五条 一日一回は外に出よう
- 第六条 友だちや仲間をつくろう
- 第七条 社会活動をすすめよう
- 第八条 家族の協力で自立につとめよう
- 第九条 保健・福祉サービスを大いに利用しよう
- 第十条 私たちは〇〇〇が出来る

右掲のことは、全国老人クラブ連合会が策定した「寝たきりゼロ」の十ヶ条だと、九一年五月末の福祉新聞紙上で読みました。

新しい情報が氾濫しています。「寝たきりゼロ運動」ということばも、この頃大はやりのコトバです。いくつかの〇ケ条も出ました。が、この十ケ条は、高齢者が老いてゆく体験の中で、互いによびかけ合う声の暖かさと重さを持っています。特に第四条と第十条から、心に沁みる説得力を感じました。同紙次々号（六月一〇日）の社説にも、この十ケ条がとり上げられました。

第四条の例として「いつもおしゃれに心がけよう」が挙げられていました。ある時がまん、ある時の一言、小さなほほえみ等も、一日の生活の中でピンと高まるハリになるのではないでしょうか。

第十条の持つ慰めと励ましの深さには、大変感動しています。出来ないことに目や心を奪われやすい高齢期です。が、毎日、私たちに許されている沢山の、今出来ることを、もう一度探し出して、感謝したいものです。そして、出来るはずのことも、もっと熱心に探し出して、長寿を頂戴している者らしく、ゆたかに大切な日を生き抜かせていただかねばと、考えさせられました。

信じられますか

みなさまが——施設利用、ナオミ館利用の方々も、職員も——幸いこの猛暑を、しっかり乗り切っていて下さいます。

うれしく、ありがたいことだと感謝いたします。でもお盆が過ぎますと、ぼつぼつ夏の疲れが出てまいります。今から、しっかり栄養を摂り、休息と運動をバランスよく生活にとり入れて、くれぐれも健康にお過ごし下さいませ。

さて、先頃、次のような文章に出会いました。

「アメリカのギャラップによれば、一九七九年の調査ではアメリカ人が信頼している機関は、一位・教会、二位・銀行、三位・軍、四位・学校、五位・新聞だった。一九八八年の調査になると、変わらないのは、一位・教会で、二位・軍、三位・最高裁、四位・学校、五位・銀行となっている。アメリカ人には『信頼できるもの』がある。

信じられる、頼れる、すがれる、だからそのために献身してもいい。そういうものがアメリカにはたしかに存在する」(千葉大学K教授)

これは、現代国際社会の中の日本を語る文の一部です。

日本の社会には「信頼できる」ところや人がだんだん少なくなってきました。淋しく不安です。小さなみぎわ会という社会にも、信じられる、頼れる、すがれるものがほしいです。必要なのです。幸いにも、まず私たちは、神を信じています。それ故に、互いに隣人として信じ合い、すがり合い、またつくし合わなければ、安心して生きてはゆけないのだと、少しずつわかってまいりました。

信じ合おうという気持ちだが、静かに積み重なってきているのがわかります。

「信じ合える、頼り合える世界がここにはある。それが私たちの生きてゆける力になるのだ」と、私はこの文を読んでから、考えさせていただいています。

✳ ギャラップ：アメリカで最も権威ある世論研究所

『人生の実力者』ということばから

またしても借りものでございますが、先日よく知っている、また有名なK医師の随想に出逢いました。一部を借用、要約いたします。

「わが家の子供たちが受験に苦闘している机上に『基礎養成コース』とか『実力養成コース』とか書かれた参考書をよく見た。受験のための実力とは、試験によい点をとる力であろう。政界の実力者とは、政治を実際に動かす力を持つ人を指すのであろう。私は最近、『人生の実力』ということをよく考える。精神科医として、ホスピス医として考えさせられる。

再発をくり返す分裂病の息子を持ちながら、仕事と家庭を両立させて立派に明るく生きている母親を見て人生の実力者だと思う。両親と妻とを相次いで失ったにもかかわらず、仕事のかたわら週末にはボランティアをしている中年の男性を見て、この人も人生の実力者だと思う。普通であれば元気をなくし、落ち込んでしまうような体験をしたにもかかわらず、それを見事に受容して、乗りこえてゆくことの出来る人は人生の実力者である」

文章は更につづくのですが、私はこのことばに出逢い、心を打たれました。みぎわ園、いずみ寮、ナオミ館に、正にこういう人生の実力者を見ました。見えています。K医師の暖かい心

と、静かな澄んだ眼が文章の中に流れていることを知り感銘しました。もう少し拝借します。

「状況と態度ということを考えると、私たちは状況に関しては無力である。どうしても避けたいと思われるような状況に、否応なしに置かれることがある。しかし、その状況をどのように受けとるかという態度に関しては、私たちの考え方によって、プラスにも、マイナスにもすることが出来る。バーナード・ショウは『経験そのものが人を成長させるのではなく、人を成長させるのは、経験への態度である』と言っている……」

いよいよ九月です。敬老の月です。老いと老いに伴ってくる様々の状況を、人間として自分の成長に結びつけるように受け容れる態度を、それぞれの立場で考えてゆきたいと思わずにはおれません。

施設と地域

いずみ句会の一〇月の兼題は「さわやか」です。日本語はほんとに美しいことを沢山持っています。正にさわやかな秋のおとずれとなりました。

今年は猛暑の上に何か不順な夏でした。九月に入ると台風が相次ぎ、過ごしにくい気候でしたが、入所のみなさまも、職員も元気に秋を迎えることが出来ました。うれしく感謝で一パイです。

本号は、施設と地域の交わりをテーマにいたしました。みぎわ園が生まれて二年余りになりますが、地域との交流はまだ流れが細いと感じています。これは私の責任です。その理由は、まだ老人ホームが珍しい時代にみぎわ園を開きましたため、このことは一女医の美談として何回か大新聞に大きく報道されました。はじめ、人知れず黙ってこの仕事に挺身しようと考えていた私は、却って自由を失いました。そしてただ黙々と事業をすすめるべきだと考えていました。

地域の方々の理解と協力は必要でした。が、それを口に出して求めることは賤ましい、恥ずかしいことと私はその頃考えていました。その中にも、沢山の暖かい友情や善意をいただいてきました。広く地域のみなさまのご支援もありました。私も自分の姿勢を変える努力をしました。招かれると勇気を出して下手な講演に何回も出かけては、老人ホームへの誤解や偏見をなくしてい

ただき、よい福祉社会が地域に育つようにと祈りました。

三年前、みぎわ会の地域活動として「西脇市老人問題を考える会」をはじめました。理事会でいろいろ相談して、まず市長をはじめ「長」という要職にある方々に呼びかけました。今春までに一回の「考える会」を持ちました。市長様はじめみなさまが殆ど毎回出席して下さり、自由な、明るい、建設的な話し合いを熱心に積み重ねて下さいました。若い世代の代表として、JC（青年会議所）の方々にも参加していただきました。私は、この集まりは、地域への福祉の「種まき」だと考えてきました。

近頃、この種が細い根を下ろしはじめています。大きく、たくましく育つためには、もっと広く、深い「土」が必要になりました。最初から協力いただいた方々にご相談をしています。そのうちに必ず「考える会」が地域の福祉活動の一つとして、明るい高齢社会を築いてゆく頭脳と力になりますよう、福祉現場から出た小さな声を守り育てていただきたいと、希望を持って願っています。

一〇月は私の誕生月です。喜寿をいただきます。感謝です。
希望が一パイです。希望の中に涙が一パイでした。

朝毎に新たななり

一〇月はフリーパス出来るのではと、ひそかに期待して月末の日々を数えていましたところ、二八日朝、Nさんが亡くなられました。全く予想もしなかったことです。音もなく散り落ちる一枚の木の葉のような「死」でした。

一〇日前に診たNさんは、胸のあたりに少し肉付きされ、いつにもなく元気そうでした。「ずいぶん元気になられたわネ。これからは少しずつ起座おきしている時間を長くしましょうよ、ネ!!」あなた一番若いのよ、ネ」と私は語りかけました。いつもは、やや暗い表情で、低く、か細い声しか出さないNさんは、この時はハハハ……と声を立てて笑い、うなずかれました。その目に光が見えたと私は感じました。とてもうれしい気持ちにしていたきました。

一人暮らしだったNさんが、二年前、脳梗塞で倒れているのを、やっと二日経って発見されたという記録があります。どんなに辛く淋しかったことでしょうかと切ない思いが、片マヒ、寝たきりの彼女に接する時、いつも心をよぎるのでした。まだ昭和生まれのNさんに、少しでも活力ある日々を願わずにおれませんでした。入所後一年半が経ち、施設のケアや抗うつ剤が、やっと白い歯を見せてハハ……と笑う日に至らせた……と思ったのですが……。

先日、「生きる」とか「いのち」ということには問題意識がからんで、なんとなく使いたくない気持ちだと仰った方があります。それは、近頃の少年たちが一寸したことにも「生命かける!!」と口走ることへの怖れにも似たことからだと聞かされました。幼い、若い人たちの世界のことです。

毎日、老いた人たちがばかりと暮らしていて、「生きる」ことの重さ、「いのち」の奇しさをずしりと強く感じている私は、改めて自分の歩んでいる世界を見、考えてしまいました。

長く、遠く、きびしい道を力一パイ歩み抜いてきた老人たちの、すっかり弱々しくなってしまう、小さく心細くなった今日の生命を、大事に大事に思う私たちの毎日です。

二〇分前、いつものように朝食を摂ったNさんのいのちが、誰にも気付かれず、フツと消え去ったことを知り、その安らかな美しい顔を見る時、私たちは皆、「今日のいのち」が人の力を越えたところで定められ、また支えられていることを思わずにはおれません。勿体ないと言えいいのか。

生命の尊さは、畏れにも似た、深い、しんとした想いの中へ私たちを導いてゆきます。

『われ、この事を心に思い起こせり。この故に望みをいだくなり。われらのなおほろびざるは、エホバ（神）の慈愛（いつくしみ）により、その憐憫（あわれみ）の尽きざるによる。これは朝ごとに新たなり』

十二月　かえり見て

『時の歩みは三重である

未来はためらいながら近づき

現在は矢のように早く飛び去り

過去は永遠に静かに立っている』

シラー（ドイツ）

十二月になりました。時の経つのは早い早いと口々に言い交わす私たちですが、春の花、新緑のそよぎ、炎暑の夏、名月の秋、オレンジ色に燃えてゆく山々と日光に透けるくれないの紅葉、そして、今日この頃の風と、誠に秩序正しく営まれる自然を見る時、創造主のみ手の下に在る日々を、畏れにも似た思いで考えさせられる一年の暮れでございます。

今年を思いますと、四月には、いずみ寮創立一〇周年を多くの方々の祝福をいただきつつ、感謝の中に記念いたしました。きびしい施設運営の中で、よりゆたかなケアとサービスを期待してみぎわ園、いずみ寮、ナオミ館三施設の一体化を目ざした人的、業務的交流は、当初のときどい

や、いろいろのきしみを乗りこえて次第になめらかな流れに向かってまいりました。

昨秋、法人のものとなった西側の雑木林の中に、遊歩道を作る思いつきが、この程実現しました。高い高い雑木の間から、初冬の空と、ゆるやかな雲の流れが見えます。夏には深い緑陰となることでしょう。やよい会（注・いずみ寮の自治会）での投票で「いずみの小径」と命名され、早くもみなさまの「楽しい散歩道、安全な仲よし道、そして独りで哲学する小径」になっています。現在殆ど失われた「土」と「ジャリ」の感触が暖かく足裏につたわります。

法人理事会では、設立理事の一人である藤原一郎理事が八〇歳を期して辞任なさいました。いさぎよい、またロマンチックな辞任のおことばをいただきました。創立以来二三年間、筆舌に尽くせない、大きく暖かい熱意と、深い洞察力、良識を注いでいただき、育てていただいたみぎわ会にとり、親を離れる思いです。

後任としては村井靖男様をご推せんいただきました。村井先生は西脇市社協会長様です。藤原先生は今後も顧問としてお力添えいただくことになりました。淋しい別れにつづき希望にみちた出逢いをいただきました。時は流れゆきますが、大切なことは守られています。

一方、西脇市老人会婦人部や、芳田地区婦人会幹部の方々、西脇北高校生徒さんたちから、ボランティア活動が沸々と湧き出て寄せられてまいりました。マンパワーに、辛い乏しさを覚えていました私たちにとり、大きな喜びです。よろしくお願いいたします。永続のために。

社会福祉法人みぎわ会

- ◇特別養護老人ホーム
みぎわ園 ☎22-1358
- ◇軽費老人ホーム
いずみ寮 ☎27-0777
- ◇西脇市デイサービスセンター
ナオミ館 ☎22-8555



みぎわ会

Vol.2 No.1 だより

第10号 1992. 1. 1 発行

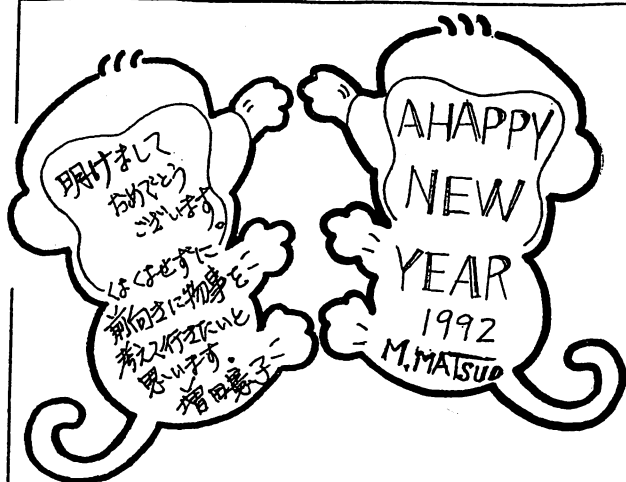
〈発行〉 理事長 松尾周子 〒677 西脇市八坂町213-1

新年特別号



健康を維持し日々平安に

岡本好夫



『一日一生』

年末、恒例の京都南座の「顔見世」を観ました。

三代目「雁治郎」を「扇雀」が襲名した記念興行でもありました。この雁治郎が「娘道成寺」を演じました。重い何重もの衣裳をつけて、これまた重い髪と冠をつけて、一時間半をおつづけての舞踊劇ですが、三味線、唄、鳴り物との見事な呼吸の調和、華麗な中に莊重な気品があり、物語の屈折した女心を溢るるばかり美しく表現する芸技に感動してしまいました。

以来、いろいろ考えてしまいました。

どうしてあんな真剣な、一面過酷な演技を一日の休みもなく一ヶ月も続けることが出来るのか、ということです。その間の体の健康と心の平静をどうやって守ってゆけるのか。一人の名優に精一パイの演技を尽くさせるために、毎日一分一厘の乱れもなく背後を守る、多分三桁もの人たちのチームワークは、どうして保ってゆけるのか、等々考えつづける中に、フト『一日一生』ということばが見えてきました。

あの方たちは、正に、毎日、今日を限り、全身全霊をその一夜に打ち込んでおられるのであらうと思ひ至りました。それが伝統の重みであり、「名」を重んずることへの必死のとりくみな

のだと。

あの感動に溢れた観衆の大拍手が耳の中に湧き上がりました。そのうちで、私は、私たちの毎日のステージを見つめました。

ここにも、また『一日一生』の心と技がありました。

明日を期せない二〇〇名余りの入所の方たちを守る、七〇名にも足りない私たちが一人のようになつてケアに尽くす毎日です。二三年間、一日の休業もありませんでした。

ここにはきらびやかな緞帳も、美しく着飾って楽しむ観衆もありません。流れる汗を湧き上げる拍手が拭うことも出来ません。が、誰も見ていない、かくれた所で汗が流されつづけてき、その中で伝統という力が積み重ねられています。私たちにとり「みぎわ会」の名は、その体と実を表す尊ぶべき名であります。入所のみなさまの安らかな瞳と、声に出ないことばに、私たちは汗を拭われ、今日を限りと全身全霊を打ち込んでいます。

『あなた方は祈る時、人に見せようと会堂や街角に立って祈るな。奥の部屋に入って、戸をしめ、隠れたところにおいでのになる、あなたの父に祈りなさい。そうすれば隠れた行ないを知らんになる神は、報いて下さるであろう』

『居心地』

時々、いろいろの集まりなどで、「これは私の来るところではなかったのでは……」と思えます。居心地のわるい不安な気持ちです。その場の話題や考え方に自分がうまくとけ込めないことがわかる時です。その反対の場合も同じです。どこか、ことばや心の通い合う、安心出来るところへゆきたいなあ、とか、自分はもうこの時代には通じない存在かも……。というような被害妄想に近い気持ちに落ち込むこともあります。

疲れや老いゆえでしょうか。

今年一枚の年賀状に「おたくは、私のオアシスです」と添え書きしたことを思い出しました。五〇年余りも長いゆきつけの美容院に宛てたものです。いつも変わらない、明るい「いらっしやいませ」の声、シャンプーのあとの短い、頭のマッサージ、時にはやさしい指が、頸から肩へと伸びます。言いようもなく快い気分です。この心地よさを「オアシス」と書いてしまいました。

みぎわ園の「みぎわ」は「汀」または「水辺」と書かれることがあります。原文は聖書の中の「詩篇二三篇」の美しいうたからいただきました命名です。疲れたり弱った者たちが、やっと辿りつけた、安心して居られる泉「オアシス」のほつりを意味しています。

安心出来る、元気の出る、快い、居心地のいいところで暮らせることは一番幸せなことです。殊に、年老いて疲れた人たち、弱い人たちには。

みぎわ園やいずみ寮が、その名のように「憩いの汀」であることは、私たちのいつも忘れない、大事な目標ですし、祈りです。シャンプーのあとの快い短いマッサージのように、誰もが、そういう心休まる慰めにみちたサービスをしたいと精一パイなのです。ただ、人手が少なくて時間の足りないことが、私たちの口惜しさですけれど。でも、皆が心と力を合わせて、信じ合い、愛し合ってゆけば、きっと「どこへもゆきたくない。ここが一番いい」と言える、居心地のよい「みぎわ村」が出来てゆくでしょうし、そうやってきています。感謝です。オアシスの泉をいただいて、元気を出しましょう。安心して暮らしましょう。

春と花

三月半ばのある日、水戸偕楽園の梅林が放映されました。テレビの画面からさえ仄かに奥床しい香りが漂う想いでした。ぜひ一度行ってみたいと思わずにはおれませんでした。

偕楽園を管理しておられる方でしょうか、「梅狩り」ともいえる方のことばを聞きました。こういうことです。

「これはここでも一番古い梅です、何百年も経つでしょう。この幹のねじれているのをごらんなさい。古い梅の幹はねじれるのですよ」画面には斜めに伸びた太い梅の幹が映りました。古木の肌には実にくっきりと「ねじれ」が映し出されました。しかし、その古木は他のどの木々にも劣らず、みずみずしい鮮やかなくれないの花を咲かせていました。

風雪に耐えて生き抜くということは、ある時は激しい風に傾き、またじつくりと立ち直るといいうくり返しであり、その軌跡が樹幹に刻み込まれた「ねじれ」なのでしょう。長く生きる人も同じだと感じました。生命のたたかいとその傷跡から咲き出でた、凛々しく可憐な花に、深く心を寄せる一時でした。

数日後、産経新聞の「産経抄」に大変美しい文章が記されていました。コブシについてです。

数節を抜粋してみます。

「コブシの花は枝高く咲くからそれと気付かないが、鼻を寄せれば仄かな芳香を漂わせる、そこに『春愁』にも似たものを感じる。……」

「コブシの太い幹を用いて床柱にした家を知っている。渋くたわんだコブシの柱は、いくらか腰は曲がったがなお剛直な“古武士”の風情をのぞかせている。……座敷の天井には白いコブシの花が幻のように見える気がする」と。

四月！ 春です。老若男女誰にも訪れる春です。それぞれ自分の花を咲かせていただきますしう。

『手』のはなし

手があがる、手を打つ、やり手、手の内、奥の手などなど「手」はずいぶんよく使われることばです。手は力を表します。心を語ります。そしてその「人」をも語るコトバになるものです。

みぎわ教会の私の席の向こうに「聖ダミエンの手」というブロンズ像が置かれています。

船越保武先生（芸大教授）の名作「聖ダミエン」の全身像——等身大——から、そのたれ下がった両手を手首のところから切って上向きに向かい合わせた「部分像」です。

一〇〇年余り昔、アメリカ大陸から沢山のハンセン病患者がハワイ群島の中の一つ、モロカイ島にすてられました。

ベルギー出身の若い神父ダミエンは、神の救いの福音と愛と慰めを携えて、この地獄化した孤島に渡りました。病者と寝食を共にして、神の愛を伝える間に、業病に感染し、遂に島の土に病患者といっしょに葬られました。

ベルギー国王は、数年後ダミエン神父のことを聞き、軍艦をこの島にさし向け、神父の墓を展き、遺体は祖国へ迎えられました。その柩は国旗で覆われ、儀仗兵に守られ、英雄の凱旋とされたということです。

ブロンズの両手はハンセン病特有の神経マヒの形です。指は激しい労働で節くれ立っています。僅か三八歳で世を去った神父にかかわる、重く、深い物語を日曜日毎にその手は私に語りかけてまいます。

こころ

河野 進（癩病院医師 詩人）

心は あるか ないか わからない

ことばや 行いに あらわさなくては

祈りや 信仰もまた

※聖ダミエンの等身像は神戸兵庫県立近代美術館に展示されている。

『五五年の友情』

今月は私の全く個人的なことを書きます。おゆるし下さい。

九一年十一月、東邦大学卒業五五周年記念クラス会の案内を受けました。翌年五月とのことで「元気でいればきつとまいります」と返信したものでしたが、幸い元気で参加出来ました。

海に近い、横浜のホテルへ日本中から四二名のクラスメートが集まりました。全級友の三分の一です。皆元気でした。七六歳〜七八歳の老女医たちの集まりは、どういう景色かしらと何となく楽しい期待を込めて、久々に伊丹↓羽田のコースをとりました。その往復にも楽しさが一パイでした。五年前、五〇周年の集いを持ってから一三名のメンバーが亡くなったことも知りました。しんとする気持ちでした。卒業早々に都落ちした私には、共通の教室や、医局や、教授等の話題もなく、いつも一人だナと思うのですが、

「筑紫ゆ 陸奥ゆ 集い来し 乙女子若く 眉清し」

という古風な校歌そのものだった級友が、それぞれの五五年を生き抜いてきた道程の重さを黙って考えることが出来ました。けれど誰も彼もがあっけらかんと、学生時代とおんなじなのには驚いてしまいました。ただ一人仲よくしていたSさんと、いつものようにいろいろ話しました。彼

女は、昔のことをいろいろ話してくれました。以下のことは、全部私が忘れてしまったり、知らなかったことでしたが、彼女の友情が私に注ぎ込まれる思いでした。

一、「ネ、松尾さん。あなたネ、グリンピースのごはん作って私を招いてくれたでしょ。私はごはんも炊けない人間だったものネ」私は自炊生活でした。

二、「二・二六事件の時よ、覚えてる。あなた、お母さんに長い手紙を書いたのよね。それを私に読ませてくれたのよ……」全く記憶にありません。

三、「戦争の終わり頃よ。彼は出征していたし、私は一人ぼっちよ。モト子（当時四歳）にね、空襲で、もしひとりぼっちになったら、ここへゆくのもって着物の胸に松尾さんの住所と名前を書いて縫いつけてたのよ……」すごい告白でした。涙が出るような。モト子さんは立派なドクターになっています。

四、「私ってずいぶんのん気に生きてきたのね。昔あなたにもらった讚美歌にね『父がわれを愛し給いし如く、我も汝を愛したり。我が愛に居れ』ってあなたが書いてくれたでしょ。私はクリスチャンじゃないけれど『わが愛に居れ』ってことばにとっても安心出来たのよ……」等々。

埼玉県の名家に生まれ育った彼女のいろいろなことを、私はよく知っていますし、私が貧乏な学生生活をしていることや、私の家族のことを彼女もよく知っていました。毎晩毎晩、疲れることなく話し合った二〇代前半の学生の頃が蘇ってきた一時でした。

あいさつ

いつも「みぎわ会だより」をお読み下さるみなさま、こんにちは。

七月になりました。間もなく暑い日々が訪れることと存じますが、いかがお過ごしですか。

ずっと前のことですが、ある官庁を訪れました時「挨拶をしよう」と大きく書いた幡がその部屋の壁にはりつけてあるのが目に入りました。「ここは挨拶がない職場なのかしら、何て淋しいこと」と感じたことがあります。

みぎわ園やいずみ寮へいらっしゃったお客様方から、「この職員さんはきちんと挨拶をされますね、明るくていいですね」というお声を度々聞きます。うれしく、ありがたいことと考えています。

今年も秋には若い二人の職員が「ヨーロッパ研修」に出かけます。

「流暢に外国語が話せなくても、『おはようございます』『こんにちは』『さようなら』『ありがとうございます』『失礼しました』『どうぞ』『おやすみなさい』という、代表的な挨拶のことは、訪問するデンマーク、ドイツ、フランス、イギリス、それぞれの国語でしっかり覚えておくことが大事ネ。それで十分気持ちは通い合うと思うわ」と、私はその一人に話しました。

六月二十六日、二七日の二日にわたり、大阪で「第一六回キリスト教老人ホーム研究会」が開かれました。全国から八四名の同信の、同労の方々が集まりました。

大変すばらしい研究会でした。

開会礼拝では、

『その日、すなわち、一週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人をおそれて自分たちのおる所の戸をみなしめていると、イエスがはいつてきて彼等の中に立ち「安かれ」といわれた。弟子たちは、主を見て喜んだ』

という聖書の言が引用されました。その中で「安かれ」という挨拶は、原語は「シャローム」であること、これは「あなた方に平和があるように」という意味だと語られました。強大国に囲まれた小さなユダヤ国はいつも外敵の脅威の不安にさらされていましたので、この「シャローム」という挨拶には相手への心からなる祈りと親愛が込められています。

平和な日本でも、私たちは天災、人災など毎日いろいろな危機と不安に囲まれています。

暖かく、やさしく、力強く挨拶を交わすことは、社会生活の基本的な大切な「礼」のはじまりです。また、挨拶し合えることは、うれしく幸せなことだと深く教えられました。平和は神様の賜りものです。

ではまた、八月のお便りをお届けいたしますまでみなさまに心にこめて、シャローム！

パントマイム

日本特有の暑い夏日がつづきますが、お元気でご銷夏の程お祈りいたしております。

今月のテーマは「パントマイム」といたしました。六月末のキリスト教老人ホーム研究会での講義(1)で、「キリスト教社会福祉の四原理」(阿部志郎)が引用されましたが、その項目の一つ「匿名化」を「福音のパントマイム」であると話されました。このことばに私は強い感動を受けました。パントマイムは外語辞典によれば——默劇、無言劇、俳優の身振り、表情だけで行なわれる演技、演劇——とあります。

二五年前、私は老人ホームを創ろうとしていることを出来るだけ人に知られたくないと思いつづけていました。が、殆ど計画が決まった頃、尊敬していました故千頭直次郎先生にだけポツとお話をしました。先生は「それはええことや、僕も考えたことがある。けど何で医師会に相談しやへんのや」と仰いました。「でも先生、私恥ずかしいんです。私のような貧弱な会員がこういうことをしようとしているなんて、医師会の先生方にはよう言いません」と答えました。

その頃は国も、県も、社会も、老人ホームを創ることにこそ強い関心がありませんでした。私は、これは私の全く個人的な夢なんだから、黙って人知れずやりたいと考えつづけていました。

しかし、現実には私の小さな力ではとうてい無理でした。沢山の方々の様々なお力添えをいただくかねばなりませんでした。漸く施設が出来てからも、私はなお人知れずやりたいという気持ちを持ちつづけていました。「松尾さんはこれから十字架を負われることになりました、どうぞ松尾さんをソツとしておいてあげて下さい」当時の西脇市長高瀬信二様が、開園式の祝辞の中で下さったことは忘れることが出来ません。

「人知れず」と願いながら私は二三年間「老人ホーム」一すじに夢中で生きてきてしまいました。ただ、私の創った老人ホームが淋しい人たちにとって「憩いの汀」のような安らかな気持ちのいいところになることばかり考えて、時の経つのもわからないようでした。日本の高齢化がすすみ、もっと老人ホームが必要だと言われはじめ、どんどん立派な老人ホームが建てられてきました。その今でも、やっぱり私は人知れずやっていると思いつづけ、その自分がおかしいやら、恥ずかしいやら、哀しいやらという気持ちです。誰にも見えない「独り芝居」を夢中で演じつづけていることを、パントマイムと言うことは出来ないでしょうね。でもふり返れば、シナリオは神のみ手の中にあっただと信じています。演技が拙かっただけです。神様お許し下さい。

講師のことを聞きながら、こういう想いが強く私を打ったのです。長い間に、県や市へも厚かましく物言うようになりました。けれど、私はやっぱり今でも「パントマイム」をやっているような気持ちです。

旅

残暑お見舞い申し上げます。今日この頃の暑さは、体力の低下している高齢者にとってなかなか耐え難いものですが、みぎわ園でもいずみ寮でも、みなさまがよくがんばって下さっています、大変うれしく、私の方が力づけられています。

私はこの八月、スコットランドからロンドンまで、英国縦走というような旅行をいたしました。私の〇冊目のパスポートも十二月で期限となります。私にとってこれが海外旅行のおしまい、という気持ちで選んだコースでした。なによりもありがたかったのは涼しいことでした。北のインバネスのあたりやエジンバラでは寒いとさえ感じました。おかげでよく歩くことが出来ました。ネッシー（怪獣）で有名な「ネス湖」、世界のゴルフの発祥地「セント・アンドリュース」、名作「嵐が丘」が書かれた「エミリー・ブロンテ」の教会や博物館、そして大文豪「シェイクスピア」生誕の家や博物館等々、英国人が誇りと共に大切に守っている自然や歴史の場を訪れることが出来ました。なかでも旅人としてうれしかった一つは、「嵐が丘」を読んだ少女時代から是非一度見たいと願っていた「ヒース」の花——荒れ地に咲く小灌木の花でしたが——に逢えたことでした。広々と波打つスコットランドの丘が、ヒースのうす紫でぼうーと稜線を画いている風景には、

心足りる旅情に浸れました。ロンドンの「サボイホテル」をはじめあちこちで、宮殿のようなホテルに泊まったのも勿体ない体験でした。

一九日、蒸し暑く世界一混雑している大阪空港に無事着地し、帰宅しました。きれいにお花を活け、お茶を入れて下さっているわが家に帰り着いた時のうれしさ、安らぎは、何とも言いようのない旅の締めくくりでした。

人生は旅だ、と聖書にも記されています。旅はいつか終わります。帰りゆく「わが家」や目的のない旅は哀しい放浪——さすらい——と言うほかありません。帰り着く「故郷」や「わが家」があつてこそ旅は楽しいし、たとえ淋しさや不安があつても、終に帰りゆける「安住の場」をしっかりと持っていれば、苦勞や失敗や危険すら大事な思い出に変わるのだと、この度の旅行で沁々と知りました。

みなさまの多くも、私も、長い人生の旅路を辿つてまいりましたね。手離せなかった重い荷物を全部降ろして休める「故郷」、旅の疲れを癒される安らかな「わが家」を、神様は約束して下さいます。もう暫く、残された地上の旅を仲よく、楽しくまいりましょう。一足、一足、ゆっくりまいりましょう。「天のふる里」を目ざして。でも急がないで下さい。みぎわ園もいずみ寮も、まだまだ「全館冷暖房」とか広い食堂とか、ますます住み心地のよいわが家になろうとしていますから、楽しく一日一日の旅をつづけてまいりましょう。希望が一パイです。

名月

いずみ寮の自治会は「やよい会」という美しい名です。発会后一〇年経ちました。

九月一日は明（名）月の日でした。この日の午後、恒例のやよい会主催の「お月見会」が二階の集會室で開かれ、私も招かれてまいりました。ナオミ館利用の方も数名参加されました。

まだ日の高い午後のお月見とは？と思ったのですが、何と、いずみ寮集會室には、もうすっかり晴れ渡った空に、ぼっかりまん丸い「名月」が上がっていました。美しいすきとお団子のお供えも、ぴったりにまわってしつらえてあります。

会長の橋本さんの司会の下に、プログラムはすすいとすすんでゆきました。やよい会のみなさんが一つになった手作りの集いでした。

大正琴、歌、舞踊、詩吟、三味線、コーラス部のみなさん等々、精一パイの演技が次々に披露される中へ、飛び入りもあり、会場には熱気が溢れてきました。拍手と笑いのさざめきの中に、八〇歳の青春が、明るくまろやかに花開いているのです。ふと気付いてみると、私はその中で何となく落ち込んでいるのです。

何てすてきないずみ寮！ 暖かく和やかなやよい会！ その現実を前にして、こういう日の来

ることを夢見願いながら、長い間、私独りで苦しみ悩んだ数々が、明月をかくす薄雲のように私の心の中に流れて、何か空しい気分です。そういう自分こそ、正に老いのグチの姿だという気持ち、それでまた、一層落ち込んでゆく自分を見ているのです。

プログラムは終わりに近づき、職員の出番になりました。題は「月の砂漠と青い月」。女性たちは、「月の砂漠をー はあるーばあるとー」と並んで唄いはじめました。と、背コブをつけた「ラクダ」が二頭現れました。毛布で身をつつんでラクダを演じるのは二人の男子職員です。涙ぐましい熱演です。すると、目を見はるばかりにきれいなお姫様と、力強い王子様が現れました。大拍手の中でお姫様も王子様も金紙、銀紙の冠を外して素顔を現し、やがて大きな月がゆらゆらゆれ、「月がとっても青いからー」と唄が変わって出ます。いつもながらの楽しい奇抜な出し物でした。

突然、一頭のラクダがトコトコ私の前に来ました。「先生、ラクダは何てなくのですかぁ」「…モウー…ラクダァーよっ」、私としては上出来の返事が飛び出しました。

うたげのあと、「モウーラクダァー」の啼き声が私の心の中で不意に「いずみ寮も、もう楽だー」という歓声に変わりました。そして心のカーテンは音もなく消え去りました。もう憂えることはないのです。大丈夫のいずみ寮になりました。

まん丸い名月が雲一つない大空に光るその夜でありました。

鶴渡る

「大空に はるか道あり 鶴渡る」

数年前、先生にもほめていただき、自分も好きだと思う一句です。が、本号は、道なき闇路を右往左往するに似た一ヶ月のご報告をいたします。

九月二二日から北陸に向かいました。二三日、新潟県長岡市の壮大な施設を見学し、二四日から三日間、富山市で開かれた「全国老人福祉施設大会」に出席。二七日には、村井、内橋両理事と大西設計士の三方を伴った横山副寮長を富岡市で迎え、二八日、富山県の「ケアポート庄川」と福井県の「ガーデンハイツ春江」という新しい施設を五人で視察してまいりました。

一〇月一日、二日は、東京で全社協主催の「社会福祉トップセミナー」に出席。五日、兵庫県社協へ。九日は大阪泊、これはみぎわ教会の新しい進展について、川崎牧師と面談のため。一二日より一四日は名古屋へ、「第一二回社会福祉施設経営協全国大会」に出席。二二、三日に亘り千葉・浦安へ、「第三回全国女性施設長フォーラム」世話人会のため。二四日は元寮母吉田明美さんの結婚式。二七日から二九日まで、兵庫県遺族会主催の沖縄慰霊巡拝団に参加。

この間には、週二回の外来診療。県立教育研修所より三七名の研修受け入れ講話、案内。二〇

日、ある女性団体に招かれ講演。二一日、兵庫県福祉部長に陳情のため上県、懇談二時間。月例の施設内研修「みぎわ会セミナー」を二六日に組み込んで、漸く一〇月が終わりました。

いくつかの施設見学の中では、ここ数年内に果たすべきみぎわ園改築への様々なヴィジョンや厚い壁のことなどが頭と心の中をめぐりました。三つの大きな研修会では、老人福祉にかかわる中央の制度、政策の流れの激しさと速さを、また社会全般の福祉に向かう意識展開と湧出の姿、更に企業界が福祉サービスに進出しはじめた大きなうねりを知らされました。潮のように打ち寄せる情報の波にもまれながら、二〇数年「何か」にこだわいつづけてみぎわ園を営んだ自分が、固陋頑迷そのものと見えてきたり、大切に思いつづけてきた「何か」が、やはり最上至高なものだと思い至ったり、ある時には愚かな「迷い」ではなかったかと空しく落ち込んだり、という道なき大海原に浮かぶ小舟さながらの哀れでもありました。が、二〇〇名の老いの仲間の施設利用者と、六七名の孜々^{しし}としかも嬉々と励む職員に支えられ、一日一日は無事に過ぎてゆきました。一〇月一三日は七八歳の誕生日でありました。この日、名古屋は雨になりました。暗い見知らぬ夜の町を傘も持たずに歩きました。ゆくてを見定めることが出来ない気持ちでした。

早十一月になりました。心を静めて見れば、翼を張り、その翼を連ねて大空にしかと道を見定めて渡り来る鶴に似た、迷いなく、美しく、気品あるみぎわ会が、今日も力強く飛翔をつづけていることが、夢ではない現実なのだと知らされ、力づけられる想いです。

無事

いつも本誌をご愛読下さるみなさまを心に覚えながらペンをとりました。

お茶席では、年末になりますとお茶杓などの銘によく「無事」ということばが使われます。何気なく、年末だから「無事」がふさわしいのかナーと思ってまいりましたが、「無事」とは何という大きな、大事なことを言い表しているか、ようやく知らされてまいりました。

みなさまご無事ですか。どうぞどうぞご無事でいらっしやいますようと祈りつつ、本年最後の「みぎわ会だより」をお送りいたします。

今年はこの辺りの紅葉は、一入美しくございました。朝に夕に、そのくれない、そのイエローの透明な輝きにただ立ち止まって、息をのむ思いで見入るばかりの日がつづきました。診療所にいらっしやる患者さんの一人が、「今年ももみじがきれいやナー、けど、また来年も見られるやろうかー」と話されているのを聞きながら、そういうことばの後に今日の無事が言われているのではないかと感じたりいたしました。

さて、みぎわ園、いずみ寮、ナオミ館、それぞれ幸いにも大した事故もなく、精一パイの一年をここまで辿ってまいりました。中庭には新しいルデヤ館の工事がすすんでいます。三階建では

はじめてなので、その高さに驚いています。完成を見るのが楽しみです。

「ルデヤ」とは、二〇〇〇年前の使徒時代に、キリストの福音を伝えるために生命を捧げている弟子たちを心込めてもてなし、また休息の場としてその家をも開放した、ピリピ（現在の地中海に面した中央アジア地方）の町の裕福な女性の名前です。そういう名を建物に用いさせていたのだいた、貧しい私の心の祈りをご推察下さい。

どうぞ多くの方々に安らぎ、平和、そしてよいもてなしを受けていただける場所になりますよう、みなさまのお祈りをもお加え下さいませ。

走るように、流れるように過ぎ去った一年です。が、この一年間にはいろいろのことがみなさまお一人お一人にも、世界中にも、想像出来ないくらい起こりました。

あと一ヶ月。新しい年がどうぞ「無事」に訪れますように希いながら、この一年のご愛読を感謝いたします。



みぎわ会

だより

第22号 1993. 1. 1 発行

新春特別号 ▶ みぎわ園編 ◀



あけまして
おめでとう
ます。
元氣と長し
本まゆみ



松尾周子

新年おめでとうございます
勿体ないのに 78才の年を「トリ」
まじ。今年はずいがんばって
小は「92才」をうめたわー
ドイツ語で「おめでとう」
「ア、です」

あけまして
おめでとうござい
元氣でがんばりま
よろしくおねがい
大ス保

あけまして
おめでとうございます
今年もよろしくお願ひします。
今年1年がみなさんにとって
よい年になりますように...
1993
近藤美奈子

—(1)—

賀 春
あたいの羊が
迎えてくれました。感謝です。
みずの国はどんな時でも
安心して居れる所です。
今年もみんなでごえん合っ
たりしましょう。
1993. 元旦



新年あけまして
おめでとございます。
今年も元気に活動して
いきたいと思います。
どうぞよろしくお願い
いたします。
お慶び申し上げます。
小林 照美

あけまして
おめでとございます。
今年も元気に活動して
いきたいと思います。
どうぞよろしくお願い
いたします。
お慶び申し上げます。
小林 照美



あけまして
おめでとございます。
今年も元気に活動して
いきたいと思います。
どうぞよろしくお願い
いたします。
お慶び申し上げます。
小林 照美

明けましておめでとございます。
皆様、健康で新年を過ごして
ください。お年賀を申し上げます。
松達、大橋、桐子、湯原、皆と威
謝しますと共に頑張ります。
今年もどうかお交遊とご指導
を賜います。ご多幸を祈ります。
豊田 三郎
小川 孝男

明けまして
おめでとございます。
小林 照美

きさらぎ

二月になりました。「きさらぎ」という美しい名で呼ばれる月です。早春とも言われますが、一年中では一番寒い季節でもあります。

みなさまお元気にお過ごしですか。この冬はインフルエンザが流行し、いずみ寮、みぎわ園それぞれ一時爆発的に患者さんが出て、その対応に追われましたが、漸く鎮静してきました。

さて、庭を見ますと、凍土を押し上げて水仙の青い芽が少しずつ伸びていますし、梢には蕾になるはずのふくらみが見られる梅や木蓮が、寒風にさらされながら何か、かすかにほほえんでいるように見えます。

こういう自然の大きな営みにふれますと、いくつになっても、毎年、生かされている勿体なさに感動いたします。

今春は早々に皇太子妃決定のすばらしいニュースが流れました。一時、国中にさわやかな明るい早春の気がみなぎるように感じました。何となく重苦しくうつとうしい世情がつづいていましたし、日々に溢れるマスコミの情報にも、漠とした不信感を持たずにいられない私たちにとって、美しく立派な皇太子妃の出現は、国民にも社会にも大きな安心とよろこびをもたらせる、本当の

ニュースでした。

一人の女性がプリンセスの座につく決意までには、測り知れない自分とのたたかいがあったことでしょう。凍土に埋もれた球根が、堅い重い大地を押し上げて緑の芽を現すエネルギーにも似ている感があります。それを何年も暖かく包み見守られた皇太子の愛にもまた、相似た自分とのたたかいの道程があられたと思われれます。

きさらぎという、希望を内に包んだ季節にふさわしい、よろこびのニュースでした。

ルデヤ館もあと二ヶ月余で完成します。ここからまた、みぎわ園の新しい歴史が生み出されてゆくはずだと、夢をはぐくむ、早春の二月です。

久々に東京へ出ました。私にとり少々責任のある、緊張の要る集まりを千葉の浦安で持ちました。二泊三日のあとの重い疲れに、一夜東京で休息したいというのが本音でした。長い風邪が抜け切れない体調への不安から、満子を誘うことになりました。翌朝は素晴らしい好天でした。暖かい冬日を浴びながら、二人で日比谷公園をゆっくり散歩しました。

学生時代に母校主催の「日比谷の夕べ」というチャリティーの集いで、はじめて日比谷公会堂へ来たことを思い出しました。六〇年も昔のことです。日比谷公会堂は赤レンガの気品ある建物で、堂々とした威容を仰ぎ見たものでした。が、今は林立する超高層ビルの谷間にひっそりとその古風な姿を見せていました。

午後は上野にゆき、「上野の森美術館」で「MOMA」の展覧会を見、つづいて「国立西洋美術館」でなつかしい「松方コレクション」をゆっくり鑑賞いたしました。

上野公園は広く、沢山の人たちが幸せそうに楽しんでいました。巨木群も今は冬木立です。樺の梢が大空に細かくからんでいるのを美しいと思いました。

帰路の東京駅でのことです。地下のコインロッカーへ荷物を取りに満子は降りてゆきました。

私は長い階段の上で、床に腰を下ろして待っていました。まだラッシュ前の四時頃です。ポンポンと階段を下りはじめた一人の紳士がフット足を止め、私に「大丈夫ですか」と声をかけて下さるのです。「ありがとうございます。大丈夫です」と私はすぐに申しました。

いつか、マザーテレサが訪日された折、東京の雑踏の片隅で、倒れ伏している浮浪者を見て「何故誰もあの方を助けないのですか」と問われたと聞いたことがあります。他人のことなど目にも心にも止めずに流れている大都会の雑踏があります。今まで、私も東京へ行けばその流れに呑み込まれていました。が、群衆の中から、階段にうずくまっている白髪の老婆に「大丈夫ですか」と問いかけて下さった一声には、言いようもない暖かい心配りが流れ出ていました。

この体験は、私のこの小さな旅を全く新しいものに変えました。あの一声は、まだ私の心の中でキラキラ輝いて、沢山のことを考えさせているのです。

いよいよ新年度に入ります。みぎわ会を心にかけて下さるみなさまに、深く感謝し、ご多幸を祈ります。私たちにもまた、新しい希望と勇気をいただいて、五年度へ歩み出したいと願っています。

春とことば

一、春

今年は少し春がおそいと感じていましたが、二日程、暖かい日が訪れると、木蓮林の下の水仙が黄色に咲き出しました。毎年、地面を覆う黄色が広がってゆきます。

黄は「幸せ」の色だと言われています。いよいよ平成五年度に入りました。入所のみなさまの、職員のみなさまの幸せを祈らずにはおれません。そして、みぎわ会という私たちの営みにも「幸せ」をいただきたいと祈ります。

多事多難の波にもまれながらも、目標と使命を見失わずに、忍耐強く一步一步たしかな歩みを積み重ねてゆける「幸せな一年」を。

二、ことば

Kさんが三月二〇日、病院で八七歳の天寿を全うされました。重い腎不全で、私たちでは対応出来ず入院していただきまして一ヶ月余りです。Kさんは、息子さんとの二人暮らしの中から痴呆がすすみ、入所されました。二年の在園でした。入所間もない一日、痴呆と膝の障害のため、タタミの個室に居られるKさんに、面会に来られた息子さんが、老いたお母さんをかき抱いて、

いっしょに寝ていらっしやると聞きました。息子さんは生来の聴力障害で、補聴器をつけていらっしやいますが、ことは少し不自由です。在園中、仕事がお休みの日には、大抵お母さんをお家へ連れて帰られました。一、二泊とは言え、中年単身の息子さんが、徘徊もあり、おしめも要る痴呆のお母さんをケアされることは、どうかと少し気にかかるものでありました。外泊から帰園される時、Kさんはだんだん疲れが見られるようになり、昨秋来、症状が悪化してゆきました。が、気分のよい時はにこにこしている赤ちゃんでした。

お葬式を終えて翌日、息子さんはきちんと三つ揃いにネクタイを締めて来園されました。「お淋しいでしょう。でもよく親孝行なさいましたネ。お母さんはきつと満足してゆかれたでしょうね」と申しますと、彼は「いいえ、私がいくらがんばっても、みぎわ園にはかないません。病院も、どこも、みぎわ園にはかないません。母がここでお世話になっていた二年間は、母にも私も一番幸せな時でした。病院で母の手を握って私は、もう一度みぎわ園に帰れるようにして下さい！」と神様に祈りました。……ほんとにありがとうございます」

少し泪ぐみながら、トットツと語られる彼の『ことは』は、私たちの胸にしみるものでした。野に咲く水仙の黄色のように、私たちに「幸せ」を与えることばでした。

育つ

風薫る、風光る、など季語も美しく活力に溢れる五月になりました。楽しくお過ごしでしょうか。

去る四月二四日、「ルデヤ館」の竣工式を行いました。みなさまのご期待、お祈り、暖かい祝福ありがとうございました。しっかりと重みがあり、気品ある建物が出来上がりました。三階のデイルームが毎日みなさまの静かな語らいや、ほほえみや、明るい笑顔や、時にはうた声がいちる楽しい場となるには……。一階の食堂もまた、ゆっくり楽しく今日のいのちを味わいながらお食事を摂っていただく場とするには……。などなど、私たちは新しい課題を前にして緊張し、いろいろなプランや夢を積み上げています。入所のみなさま、ボランティアのみなさま、そして地域のみなさまのご協力をお願いいたします。

先日、あるお客様の求めで、お送りしようと「いずみ寮十年誌」を取り出しました。表紙から写真とついページを繰り、読みはじめ、とうとう二時間近く夢中で読んでしまいました。この一冊の本の語る一つの施設の一〇年の歴史は、私自身その過程の中心にあったのですが、また新しい感動に心を熱くさせられてしまいました。

「パウロは播き、アロンは水注げり、されど育て給うは神なり」と、聖書は福音宣教について語っています。

発想から実現までの道も、施設の体形が出来上がってから、そこが利用者たちの「わが家」「ふる里」になるまでの時も、遠く、長い、むつかしい行程です。夢と希望、挫折と失望、再び夢、の大波小波にはんろうされる日々の連続です。でも一〇年という道標に辿りつき、ふと振り返ってみると、力強い「育ち」を見せていただきます。涙を播き、汗を流し、人知れずうめく祈りを、神は「成育」に実らせて下さるのですね。

ルデヤ館も育てていただきました。育てられるうめきの中で、私たちもまた育てていただき、成長させていただくことを信じましょう。これだから苦しむことも楽しいのだと、またしても考えてしまいます。

過る日、他の用でみぎわ会の二五年の流れを大ざっぱながらにまとめてみました。ここには明らかに神様の大きな愛と力を知らせられます。感謝を込めて付記いたします。

みぎわ会二五年の流れ（平成五年四月）

一九六八年 社会福祉法人みぎわ会設立

一九六九年 特別養護老人ホームみぎわ園創立開園

定員五〇名、兵庫県下民間立第一号特養となる。

一九七二年 増床。定員九〇名となる。

一九七五年 みぎわ園診療所開設。(松尾医院閉鎖)

一九七七年 三号館増築。定員一〇〇名となる。

二階にラウンジ開設。だんらん交流、楽しみの場となる。

一九七八年 ショートステイ制度発足にあたり、第一号の指定を受ける。

一九八一年 軽費老人ホームいずみ寮併設。定員五〇名。

一九八三年 定員一一〇名となる。老健法発令を機に。

一九八四年 兵庫県の指定により、重度痴呆性老人ショートステイ棟として四号館増築。定員

四名、満床活用中。

一九八五年 地域交流等、多目的室として五号館増築。

一九八八年 西脇市の委託を受けデイサービス事業開始。

(B型) ナオミ館として市民多数に利用されている。

一九八九年 新館開設。一階二〇人増員。定員一三〇名となる。

二階 診療所。

一九九二年 ルデヤ館増築着手。国の寝たきりゼロ対策による拡張事業。

一階 食堂 一二〇名利用可能。

二階 ショートステイ室一六床。二〇床となる。

三階 デイルーム ベッドを離れて生活するために。

一九九三年四月 竣工

「変わる」こと

青葉に風光る六月がまいりました。みなさまお元氣にお過ごしですか。

みぎわ園では待望の「ルデヤ館」が美しく出来上がりました。私には「奇蹟」だと思わずにおれない出来事です。天から降ってきた建物「ルデヤ館」を、これからどううまく使うかが、大きな問題です。このことを考える中で、この一ヶ月余り、私は「変わる」ということばに捕らえられてまいりました。

「私共相変わらず元氣に暮らしています」とか、「昨夜は別に変わったことはありませんでした」ということばは、無事平穩という、プラスイメーজであります。変わらない、変わりのないことは、「よいこと」なのです。

一方、「事変」「異変」と言えば不安と不幸を連想せずにはおれません。「変人」という表現は、たとえその人が、心も行ないも正しい人であっても、何かつき合い難い、好きになれない人柄を直観してしまいます。まして「天変地異」ともなれば、どうしようもない怖ろしく不幸な出来事になってしまいます。心変わりもまた、言わば裏切りに似た侘しい状況を想像してしまいます。

「変わる」「変える」とは何でしょうか。

五月二六日はみぎわ園創立記念日でした。二五年目に入りました。ひたすら一条の光を目ざした二五年間は、一すじのまっ直ぐな少しも変わらない航跡を残してきたはずですが、その内情は、日毎に、年毎に、または事や人に当たる度に考え、迷い、苦しみ、悩んで、いろいろとやり方を変えたり、いろいろの場所の使い方を変えたりしたばかりではなく、ケアの方針や、考え方も何度も変えつつ、切り拓いてきた道、積み重ねてきた歴史であります。

「変える」「変わる」ということはむづかしく、苦痛を伴うことであるように思えますけれども、すべてのことは小さく、また大きく変わりつつすすんでいます。みぎわ園や、いずみ寮、ナオミ館の営みもまた、苦しみつつ、いろいろ変えながら、日一日の小さな成長がつづいてまいりました。

言うなれば変化は「決断」であります。考え方の柔軟さの中で決断し、希望の実現を忍耐強く待つ勇気がなくては、ただ、まわりの動きに流されてゆくだけです。変わることは心の若さではないでしょうか。

以上は、ルデヤ館への「部屋替え」のむづかしさの中で、何となく沁々と考えさせられている私の、つぶやきに似た告白です。

同居者

「私は、龍町子（リウマチ子）という人と同居しています。もう四〇年余りにもなります。私が、今日は一寸散歩したいナァと思っても、町子さんがいやだと言えば私は町子さんといっしょに寝ているしかないのです」と、長年リウマチを病んでいる一人の女性のことばを、この日曜日の礼拝説教の中で牧師は引用して話されました。四〇年余りもリウマチで苦しみ、ほとんど動けない毎日をこういうように受け容れて、つつましくというより健気に、しかも明るく生きている方の姿を深く想わせられました。

今日は診察日でした。ショートステイのAさんも長年リウマチさんに住み込まれ、殆ど動けない方です。四〇日もお風呂に入らないままで入所して来られました。マチ子さんの言うままに服用したステロイドホルモン剤で、胃潰瘍やオステオポロージスという重い持ち物も出来ています。

Aさんの入浴について寮母さんから相談を受けました。ぜひお風呂に入れてあげたいとは、誰もが考えていることです。マチ子さんを怒らせないように、ポロポロになりはじめている骨を大事に大事に、体をできるだけ静かに水平に持ち上げること、四肢を洗う時もAさんの自然の体位

でやわらかくスポンジで汚れを落とすこと、一気に厚く積もった汚れを洗い去ろうとしないことなど話し合い、Aさんには大よろこびの入浴が出来、定期的に続きました。

今日のAさんの肌はすべすべと汚れのないきれいな肌になっていましたし、入所当時の変に赤味がかったムーンフェイスも、ステロイドの減量で少し引き締まっているように見えました。ニコニコ顔のAさんの表情がそう見せたのかもわかりません。教会で聞いた「龍町子」さんのことを思い出して、私は一寸胸が熱くなりました。

いずみ寮のBさんは少し痴呆のはじまりが見えます。診察に来られる度に「Bさん、今日は何年、何月、何日でした?」「そして何曜日?」と聞きますとニコニコしながら「えーと、どうやったかいな、うちだいぶ呆けとるわ、なんにもわからしません」と仰います。が、その表情はともきれいです。「毎朝カレンダーを見て、今日は何年、何月、何日、何曜日、と口で言いながらしっかり覚えて下さいね、また毎日日記を、その日にあったことを思い出して、書いてくださいね」とよく話してきました。今日も「Bさん今日は……」といつもの質問をはじめますと、一寸緊張して「平成五年六月〇日」と、はっきりうれしそうに答えられました。「そうよ、一〇〇点ね、よかったわBさん、＼ノウダメ子＼にならないように、毎日練習して下さいね。幼児のように素直でやさしいBさんは私の女学校の先輩です。二人で手を取り合って「よかった、よかった」と、うれしく笑い合いました。

長生きをしていますと、いつの間になかなか離れられない同居人がしのび込み、でんと居座ってしまふものです。越伊太郎（コシイタオ）さん、出雲久知子（イツモグチコ）さんなど、なかなかおつきあいのむつかしい侵入者もあります。ご自分の疼みをリウマチ子さんと呼んで、仲よく同居をつづけてきた方のことを、何かなつかしい人のように思い、沢山の、お年寄りを好む同居者の名前を次々作りはじめ、考えていて、とうとう独りで笑い出してしまふ私でしたが、断ることの出来ない同居者を受け容れて、仲よく悠々と明るく生き抜いてゆく中に、よく聞く「ＱＱＬ」が芽生えてくるのではないかしら、と思ひ至りました。そして、その日々のきびしいたたかいが、私の現実とも重なり合ってしまった、また少し胸が熱くなってきました。

枯木……

毎月いずみ寮で開く「いずみ句会」は、一二五回になりました。佐藤一九八先生の暖かくまたきびしい「二句一章、客観写生」という俳句の大原則を貫くご指導をいただいてまいりました。先生の尊いボランティアのご奉仕をただ深く感謝しています。この一〇余年の時は、先生にも七〇代から八〇代へ加齢を刻まれる時となりましたが、西宮市から西脇まで、片道三時間に及ぶ遠い道を、極寒にも炎暑にも一回のお休みもなく、ご出張いただいています。なかなか上達出来ない私たちに、注いで下さっています佐藤先生の篤いお心は、同時に先生の「俳句」へのご熱意であるのかも、感銘してまいりました。

先月末、初回から一生懸命励まれたFさん、Sさん、Hさんから、もう句作する根気もなくなつたので退きたい、との申し出がありました。会のメンバーは長い年月の間に寮生、職員共々、入退会の流れはありましたが、九三歳のFさん、八五歳のSさん、八八歳のHさんは、いつかこの句会のシンボルの存在になっています。たまたま訪れたFさんのお部屋で、彼女が一人歳時記を開いて作句に励んでいらっしゃる姿を見て感動したこともありましたが、この退会の申し出には困りました。

僅か一七文字に托して季節を、風景を、またその感動を詠い上げる俳句の道は、楽しい一人遊びです。私も大好きです。が、思えば私自身あと一年余で八〇歳の大打に至ります近頃、一ヶ月僅か三句の出句にもゆきなやみ、楽しいことば遊び、ことば選びとは言え様々な約束ごとに捕らわれたり、また先生からきびしく批評されることなどが、ふと心に浮かぶと、うっとうしく「いやになる」という体験がしばしば出はじめました。

お三人の言い分はよくわかります。けれど、その座に居るべき人が居なくては、座は成り立ちません。「みなさんのお気持ちよくわかりますわ、ほんとによくわかりますよ、私もおんなじよ。でも、ここでお三人の誰が欠けてもこの場の景色がこわれてしまう。三人のお顔がそこに並んでいないと『いずみ句会』の形が出来ないわ。三句が無理なら二句でも、一句でも、いえ出句しないでも、月一回のこの場にお顔だけ出して下さいな」先生をお送りしたあと、私は一生懸命説得にかかりました。

「私もね、ほんと止めたくなる時もあるんですよ。でもね、先生にコテンパンに言われても、時たまおほめいただいても、ゼーんぜん気にしないことにしているのよ、遊びですもの。あなた方が抜けてしまうと、きっと先生もがっかりなさるわよ、申し訳ないわよね。月一回他の方々のお句や先生のお話を聞くだけでもいいじゃない？　ホラ『枯木も山の賑わい』って言うでしょう。枯木でもそこに立っていないければ山は姿になりませんものネ」ここで大笑いになりました。

三人の方はつづけて下さるようになりました。ずいぶん失礼なことを言ってしまったと思いました。が、それ以来「枯木も山の賑わい」ということばがとても好きになりました。

曲がりくねった太い幹、風雪に耐えたその構えは、そのままに立派な存在です。何となくわざわざ使われるこのことばを、私が好きだと言えるのは、毎日いっしょに生活している園や寮のみなさんたちの何も出来なくなった「老い」の姿に、けわしく長い時を生き抜いてこられた重い歴史が秘められていることが、そしてお一人お一人がその途上で流された汗と涙が「枯木」ということばの中から見えてくる、と感じているからかも知れません。

沈香 じんこう

八月半ば、H先生から私への慰めといたわりのお心を込めて、お香が贈られてまいりました。

沈香が仏印地方の「埋れ木」から採れるということは、前から聞き知っていましたが、箱の中の説明書には次のように書かれていました。

「伽羅・沈香はベトナム、インドネシア、マレーシアにわたり分布するジンチョウゲ科の常緑喬木。材そのものには香氣はないが、老木を伐り倒して数年放置したり、土中に埋めて置き、腐らないで残っている樹脂部だけを採取したものを沈香と呼びます。沈香は香料の第一とされ、その最上の品質のものを伽羅と言います」

翌日いずみ寮で、物故者を偲ぶ記念会が持たれました。ちなみに、みぎわ園では毎月、当月の物故者の記念式を、みぎわ廟前で行なっていますが、施設の性格上いずみ寮では施設内死亡が殆どありません。みぎわ園へ移られたり、病院、またはご自宅で、一二年間に二六名の方が亡くなっていることがわかりました。私はいただいた沈香を香炉に焚き込めて持ってゆき、祭壇に捧げました。ほのかなお香の漂う中で、「材そのものには香氣はないが、老木を伐り倒し、または土中に埋めて……」のことは暗示に満ちたものと思いました。

このたび記された二六名のお名前を見えますと、いろいろなつかしい想い出が、潮のように胸に満ちてきて、つい涙が流れてまいりました。いずみ寮を「終の栖」として一生懸命生き抜かれた、お一人お一人の内に包み込まれていたはずの、それぞれ固有の長い人生がもたらせた哀歎を想像いたします。忘れられないことばや交わりもあります。すべて、時の流れに埋められてまいりました。これはみぎわ園も同様です。みぎわ園の二四年余には、六五〇名の方が施設で人生を閉じられました。

「人生は人間にとって常に挑戦の連続である。『老い』は、人間に対する最後で最も熾烈な挑戦である……」これは、最近読んだJ大学の一教授のおことばですが、いかにも弱々しく無力、無為と見える「老い」の道が、人間にとって最後の最もきびしいたかいの時だと聞かされ、私は深く心に感じさせられました。

正にそのきびしいたかい——孤独、不安、寂寥に耐え、人生を生き抜いた方々の足跡が時の中に埋もれて、いつしか施設の歴史を形作しているのだと思ひ至りました。

そして去りゆかれた方々を想い起こすのは、埋れ木を焚くことのようにです。みなさまが残してゆかれた事々は時を経て今、沈香の高貴な香りのように、私たちの想いを鎮め、深い慰めに変わっているのです。

赤い羽根

西脇市社協から、一〇月一日午前一〇時三〇分より一時間、「赤い羽根」の街頭募金に参加するようにとの案内をいただいていた。

毎年一〇月、あちこちで「お願いします。お願いします」の放列に出逢う時の微妙な心のゆれを思い出しました。が、募金側に立つことは、私にとってははじめての体験です。新しいことへ挑戦出来る小さなときめきに似た緊張感を持って指定の場所へまいりました。

一〇月一日の空は、高く、青く、正に爽やかな秋晴れです。首に募金箱、左腕に黄色い腕章、そして赤い羽根が生きているようにフワフワ並んでいるケースをいただき、出陣となりました。スーパーマルエーに向かう方もありましたが、私はさくら銀行を目ざされるUさんといっしょにゆき、通りに面したドアの側に立ちました。銀行へは沢山の方が出入りされます。

赤い羽根をつまんで差し出している私などには全く無関心な人、一寸見られるとツと目を外して忙しく去る人、何故かていねいに会釈して下さって通り過ぎる人……。秋の暖かい日ざしを浴びながら、私はこの時を楽しんでいました。

不意に、二年前オーストリアの古都ザルツブルグの大聖堂前の広場の光景が心に浮かんできま

した。民族衣装の可愛い十数人の少年少女たちが、その広場に入って来ました。その中の二人の少女が広場の中央に立ちました。一人は新聞紙半面大のプラカードを胸の前に掲げています。もう一人はお盆のような「ざる」を胸のあたりに持って黙って並んで立っています。私は近寄ってプラカードを読みました。「子どもたちから子どもたちへ。白血病を病む仲間のために」と記されています。二人のうちでは子どもたちが、素朴なフォークダンスを演じています。忽ち人垣が出来ました。誰もが少女のお盆へ紙幣やコインを無造作に置いています。道ゆく人たちは皆一寸足を止めると忘れものを思い出したように、さっさと人垣をかき分けて少女に近づき、当たり前のようにお金を入れてゆくのです。見る見る少女の「ざる」はペーパーが山盛りになってゆきました。旅人の私はこの光景を眺めながら、自国での共同募金の「お願いします」風景を想い出していました。

ぼんやり想い出の中に立っている私を、銀行へ来ていたはずみ寮のSさんが見つけ「まあ先生」と出て来て、真新しい千円札を差し出して下さいました。思わず「ありがとうございます」と言っ
てしまい、第一号の赤い羽根を渡しました。丁度、昔よく子どもさんを診ていた日婦人が来られ、また千円入れて下さいました。二、三分昔話はずみしました。そして再び無為に立ちつづける十数分が過ぎました。皆忙しい人ばかりのようです。

橋を渡れば私の親しい美容院「M」さんがあります。橋を渡ってあのドアを開ければいいのだ

と私は思いつきました。少し暑く感じはじめた秋日を浴びながら橋を渡ってゆきました。ドアを開けてニコッと笑うだけでよかったのです。数枚の千円札と大きい五百円、小さな百円貨が私の箱に押し込まれるのです。びっくりしている私に「お客様のチップなどを積み立てていたのですよ」とMさんは大きな封筒を空にして下さいました。

ザルツブルグの人たちと同じやり方なんだと感じました。私も気前よく沢山の羽根を引き抜いて渡しました。来店のお客様もスタッフのみなさんも、コトンコトンと大きいコインを入れて下さいました。

これから一ヶ月、日本列島に生まれる沢山の物語は赤い羽根だけが知っているのだと思いました。

みぎわ園診療所のこと

「先生、腰がいうまんねん、歩きにくくなりました。もっとよう歩けよったんでっけねえ」
「そう、腰いた困りますね。でも長生きしていると背骨が少しずつきてね、腰いたが出たり、歩きにくくなったたりするんですよ、〇〇さん。それでもね、あなたはまだ杖なしで歩いて、よっぽどいい方よ。うーんと八五か、〇〇さん、八五年も使ったもんね、お歳から言うたらうんと上等よ」「え？ 私もう八五でっか、まあ！ 私なあ、私年づおやさかい、みんなより一つ若いんでっせ」

みぎわ園診療所では、こういう会話がくり返されます。みぎわ園入所の一三〇名の診察は、プログラムを立てていつもくり返していますが、なかなかの大仕事です。部屋から診療所への往復、着脱衣、問いかけにも説明にも大声が必要です。一日一二、三名がリミットです。

私が居室回診しましても、私が誰か、何をされているのかわからない方が沢山いらっしゃる。私が居室回診しましても、白衣を着けた私が聴診器を持ち、診察室風景の中に立っていますと、相当痴呆のすすんだ方でも、自分は今お医者さんのところへ来ているのだとわかれるのでしょ、表情が変わります。車椅子からよいしょとベッドへ移したり、下肢を圧したりしても抵抗が

ありません。

「○○さん、私よ、私わかります?」と問いかけますと、思いもかけず「松尾せんせ」とポロツとことばが出るのはうれしいことの一つです。

別に毎週月、水の午前は外来診療をしています。長年おなじみの患者さんが友情を持ってきて下さいます。いずみ寮のみなさんの中には早々と診察券を入れに来たりして下さって、大はやりのお医者さんになったような気分を味わわせて下さいます。外来は殆ど常連の患者さんなので、おしゃべりが先行して楽しいラウンジのように時間が過ぎます。「医者も姥、患者さんも姥、さしずめ姥診療所というところね」と、近頃田辺聖子さんの「姥ものがたり」に魅かれている私が申しますと、「そやけど先生、元氣しとって下さいよ、私の死ぬまでお願いしまっせ」と励まして下さいます。

先日、兵庫県老年研究会の秋季研修会が神戸国際交流会館で開かれ、出席しました。富山医科大学の辻陽雄教授の講演を伺いました。「高齢者の足、腰の疾病から」と題し、脊椎骨と筋肉の老化について面白く話して下さいました。先生の診察室には、毎日山のような来患だそうですが、先生は注射や薬は僅かで、患者と話し合うことを主としてしていると仰いました。「インフォームド・コンセント」「説明と理解」の中で、イタイ、イタイが、イタクナイ、イタクナイに変わってゆくという、正に心ゆたかな医療のあり方のお話でした。

話し合いの中で、という点ではみぎわ園診療所も少し似ています。人が人の疼みを和らげるというのはむづかしく、素晴らしい仕事です。それには最も大切なものとして人間関係がある、先生は人間をシンカンと読まれました。そしてそのきずなは愛である、と結ばれたのです。立派な講義だと感じました。

思いやり

九月につづきことばにも表せない忙しい一〇月が終わりました。今日は早十一月三日です。この日のお天気を、何か黙示的な意味で多くの日本人は期待するのですが、今年もやはり美しくさわやかな秋晴れとなりました。私にとりましても、まるまる一日の休日は久しぶりのことです。今日こそこの「便り」を書かねばと考えてきましたが、なかなか想いが生まれず、庭に出てきれいな黄葉を眺めたり、少し草引きを試みたり、また気にかかっていた何通かの手紙を書くなどしつづつ時を過ごしました。

手紙と言えば、一〇月九日午後の「家族会」のことをお伝えいたします。例年の家族会ですが、今年はとても親しく暖かい交わりの時となりました。後日、多くの方々から親しいお便りをいただきました。これほどうれしいものはございません。つい唇が滑って出ました私のお願いに、早速沢山の切手を頂戴いたしました。ありがとうございました。もっと度々こういう交わりの時を持ちたいものと沁々思いました。ご自宅と施設が同一線上に並び、入所されている方々に同じ思いを寄せ合える時になり、私どももずいぶん力づけられました。

九月には東京で大きな全国大会が開かれました。その席上で、日野原重明先生（聖路加国際病

院長）から伺った「ナイチンゲール」のことばがあります。「自分が経験したことのない他者の経験を自分で感受出来ない人はナースになるな」というものです。ずいぶんむづかしいことですが、心を打つきびしいことばだと考えさせられました。例えば一〇月九日の一時は、三五名の家族のみなさまと素直に、自由に、本気でお話が出来ました。その中で、相手の心を自分の心に移し入れて、感受し合える体験をさせていただく時でもありました。

入所のお一人お一人を、大切に精一パイお世話する毎日ですが、近頃の超高齢化、重度化、痴呆化の中では、僅かの人手で日々の重いケアを果たしてゆくことのきびしさに思いが傾き勝ちの私たちです。大切な方を施設に託されているご家族の切なさを、わが想いとするに及び得ませんことを、改めて感じました。現場の毎日の必死の中では止むなきこととは言え、よりゆたかな思いやりを持たせていただきたいと、ひそかに恥ずかしく思いました。この気持ちにはなかなかうまく表現出来ませんが、ご家族のみなさまと私たちの間に、いつも暖かい、親しい思いやりが流れ合い、それが自然のこととなってまいりますようにと、熱く希わずにはおれません。

- ◇特別養護老人ホーム
みぎわ園 ☎22-1358
- ◇軽費老人ホーム
いずみ寮 ☎27-0777
- ◇西脇市デイサービスセンター
ナオミ館 ☎22-8555



みぎわ会 だより

第34号 1994.1.1発行

〈発行〉理事長 松尾周子 〒677 西脇市八坂町213-1

みぎわ園 編



新年の志

みぎわ会 理事長

松尾周子

新年おめでとう
ございます

旧年中の厚いご交誼とご支援、誠にありがとうございました。皆様のお上に
幸多い年となりますようお祈りいたします。

「時」は目に見えず肌にも感ずることもありませんが、その大
きな流れと力は、こうした節目には沁々と見、又感じないでは居
れません。

さて、関係誌上で草柳大蔵氏の「びかびかあつめ」という一文を

読みました。氏の先輩の扇谷正造氏の遺語だそうですが、その内容は、

道 二題

一、かえり道

みぎわ園新館には小さな食堂があります。南北に走る玄関前の広い道と、東西に長く、いずみ寮まで届く道が交わる角に面しています。北面は広い庭園とほのかな山脈が、西側はすぐ道を経て雑木林が見渡せる大きな窓には、一寸しゃれたデザインフェンスをつけています。内側のカーテンもやさしくきれいな彩りです。この曲がり角は私の好きな場所の一つになっています。小さな（一〇畳位）食堂は四季を通じて二二〜二四℃に保たれており、さし入る日光もはげしさのないやわらかい明るさであるせいか、窓に添った出窓風の棚は洋蘭の生育のなかなかいい条件となっているようです。一度花の終わったコチョウラン、デンドロビウム等の鉢がいつの間にか沢山並びました。この窓辺でこうしたむつかしい花々が二度目の花をつけてくれるからです。

さて、晩秋から冬への短日になると、私の退出時間には外は殆どまっ暗です。わが家へは五〇m余の通勤距離ですが、玄関を出て暗いT字路を曲がる時、右側のこの食堂はいつも明るく灯っています。楕円の卓を囲んで数名の方々の楽しそうな夕食の団欒が見えます。テレビも映っています。これから一人自宅の玄関の扉にキイを差し込んで、人気のないわが家へ帰っている自分を、

淋しいなあと感じてしまうのは、私がひどく疲れている時のことです。「いいなあ…」という一寸したうらやましき。「いい景色だこと…」という大きな喜び。この両面の想いがいつも同時的に私の心に拡がってきて、今日一日の感謝になるのです。

数日前新館の住人Sさん、Fさん、Yさんたちといっしょにわが家でお茶を飲みました。話し合っている中で、明るい室内からは暗い道を歩いている私の姿は見えないのだと考えていた私に、みなさんが「いつも先生の帰られるお姿を見えていますのよ」と仰り、声の届かないのが残念です、とのこと。私は大変うれしい（内に一寸恥ずかしい思いを持ちながら）気持ちになりました。

それ以来、暗い、寒い、かえり道から、明るく暖かそうな部屋へ手を振ります。みなさんもニコニコ手を振って下さいます。楽しいかえり道となりました。

二、朝の道

寒い日が続いています。出勤の道のほんの短い上り坂が凍てついてすべりそうになる朝もあります。空は冬の淡く深く透明な青です。木蓮林の中の椿は沢山蕾がつき、小さく口紅を見せています。まん前の新館の白い姿が、今日一日のために私の力を引き出してくれる感じです。朝はまっ直ぐ向かって歩きますので、食堂は視野に止まらないのです。表玄関のきれいに造られたピラミッド型のヒマラヤの穂先は、高く高く並んで朝の光を受けています。新しい一日に向かう朝の道もステキです。

ありがとうございました

三月一日です。何と早い時の流れでしょうか。みなさまお元気でいらっしゃいますか。美しい青空が広がり、流れる白い雲に春が匂うと感じる今日三月一日です。「平成五年度」という、時の区切りの三月でもあります。

みぎわ園は開設以来満二五年経ちました。一日一日が新しい日としてはじまりました。その一日一日は、ある時は急流に棹さす緊張の中に過ぎ、ある時は台風の過ぎゆくのを息をひそめ、体を寄せ合って耐え忍び合うような時ともなりました。私たちに歩み抜ける力があつたとは全く思っても出来ない、長くきびしい道でありましたと言ふべきだと思いますが、同時にそれは、一日一日よろこびと希望に溢れて暮れてゆく日々でもありました。

私にとりましては、「私はこのことのために人生しています」と言える生き方へのあこがれだけで探し求めた道でありましたから、間違ったり、ゆき悩んだり、迷ったり、傷ついたりくり返して、遂には満身創痍で打ち倒れても仕方がないのだと考えていました。正に、ゆき悩むことのみ多い、間違いだらけの日々でしたけれど、一生懸命に生きることが許されました。あと八ヶ月で八〇歳になります。お出逢いするたいいの方が「お元気ですね」と言つて下さるこの頃で

す。恥ずかしい不思議な気持ちですが、身に余る時を生かされた感謝で一パイです。

幸せなよろこびの中で、この三月末、満二〇年勤めてきました「みぎわ園施設長」を辞任することになりました。変な表現ですけど、理事長の私が施設長の私にもう辞めなさいと申しつけたのです。

長い間お世話になりました各方面のみなさまに、ただただお礼を申し上げるばかりです。みなさまの導きやお支え、またお許しの中で、私には勿体ないような人生を綴らせていただきました。あと一ヶ月は今までのように一生懸命みぎわ園園長を生きさせていただきます。

それからですか？　ありがとうございます。これからも神様のお許し下さる間は理事長をつづけ、また診療活動をつづけさせていただきます。

ありがとうございます。今日はご挨拶のみとなりました。

この冬は思いがけぬ大雪もありましたが、木蓮林では水仙の青い芽が一パイ伸びています。きれいな春が近づいています。

新年度を迎えて

新年度を迎えました。みなさまいかがお過ごしですか。みなさまのご平安を祈りつつこの便りを書いていきます。

幸せの色と言われる黄色の水仙が、この辺りあちこちに沢山咲きはじめました。今日は大阪城公園の桜の開花が報られました。

みぎわ会にも新しい春が訪れました。前月号でお知らせいたしましたように、三月末で私はみぎわ園施設長を辞任いたしました。開設以来二五年間に「みぎわ園Ⅱ松尾周子」というイメージがそこに定着してしまっていましたので、退くこともなかなかむづかしいことだと知らされましたが、文字通り円満退職させていただきました。大変ありがたい、また安らかな気持ちに浸らせていただいています。

後継者として、みぎわ園施設長に横山猛（四四歳）、いずみ寮寮長に内田純子（五四歳）、全施設を総括する事務長には、長い熟練経験者である丸山智枝子（五七歳）を任命いたしました。以下全職員七六名は、それぞれの持場にそれぞれ意欲を持ち、責任を負って着任いたしました。すべて坦々と運び、さらさら流れるように円滑に経過いたしました。既に数年来私にとりましては

重い課題として考えに考え、理事会にもくり返しご相談してまいりました結果でありますので、誠にうれしく、改めてこの組織を形成する一人一人に感謝と期待を熱くしています。

近年は地球レベルで変革が相次いでいます。血生臭い手段や、陰湿な争いもくり返し報ぜられています。小さなみぎわ会ではありますが、開設以来の最大の変わり目の時です。皆で培ってきた大切なものを失うことなく、また変える必要のあることには勇気と知恵を以ってとりくんでいてほしいと祈る私です。

近頃になって、今までいつも大切にしてきた「入所老人たちを大事にしよう」ということと、「入所のみなさんを大事に思おう」ということとの違いに気付いてきました。「思い」はなくても「する」ことは出来ると知りました。「する」ことの以前にはいつも「思う」ことが大切なのだと思います。思い至って、何か深く息を吸い込む気分になりました。

「する」という「形」の中心には「心——思想」が生きて、きちっとつまれている施設サービスを生み出してゆけるみぎわ会になりますように。これが新年度を歩み出す今日の祈りでございます。

いずみ寮のこと

「えにしだの黄にむせびたる五月かな　万太郎」

こういう幸せ一パイの五月であれと祈りつつお便りいたします。今月はいずみ寮のことをお知らせすることになりました。

いずみ寮は昭和五十六年四月、「軽費老人ホームA型」として定員五〇名で開設いたしました。A型というのは「自炊生活」を定められた「B型」に対して、「給食」のある施設「A型」という意味であります。

いずみ寮入寮の要件としては、

一、日常生活の自主、自立が可能な六〇歳以上の方（夫婦の場合は、いずれか一方が六〇歳以上）

二、毎月法的に定められた利用料の支弁が可能な方
という二項目があります。

利用料は生活費（食費、光熱水費等、約四九、〇〇〇円（一律））、と事務費（人件費、管理費一〇、〇〇〇円）約一〇三、〇〇〇円）からなり、最低月額約五九、〇〇〇円、最高約一五二、

〇〇〇〇円です（平成六年四月現在）。この事務費負担額は、各自の収入（主として年金）に応じ、一二の階層が法的に定められており、その差額が公費として補助されます。また年間四、五〇〇万もの高額収入のある方の利用は、福祉施設としては困難とされています。

施設は六畳の個室に三食と入浴等のサービスがついています。「小さなバルコニーに洗濯物などを干してはいけません、花だけを置いて下さい」という一条の他は全く自由な自主、自立、自治の生活であります。入寮につきましては希望者と理事長の契約で成立します。二名の身元保証人が必要です。

開設以来一三年経ち、入寮のみなさまも高齢化され、平均八二歳となりました。しかしみなさまは出来る限りいずみ寮で暮らしたい、いずみ寮大好き、ということで「自立」については強い意識を持って生活していらっしゃいます。殊に自分の健康管理と、寮内での人間関係に一生懸命の努力をされている様子に、いつも老いを生きる人たちのすばらしさを感じています。ある時期、こういう緊張感が寮の雰囲気をはか険しいもののように感じさせられたことがあります。みなさまに、のびのびと安らかな朝夕を過ごしていただきたいと願っていた私にとっても、辛く氣にかかることでした。が、幸いみなさまは賢くこのたたかいをクリアして下さり、今はとても和やかな、明るい、自主と和合のバランスゆたかな寮風が成熟してまいりました。

毎月自治会「やよい会」の例会には、当月のお誕生祝いが兼ねて行なわれます。月一回そこで

お逢いするみなさまの表情はそれぞれにきれいです。殊にお誕生月の方々のぴたりと決まった装いと身だしなみにハッとさせられるのです。みなさんステキです。長寿のよろこびが溢れる美しさには、私自身も深い感銘を受け、心よりうれしくお祝い申し上げます。

俳句、手芸、ソロバン、コーラス、大正琴、カラオケ、お茶等沢山のグループ活動があります。アウトドアの行事も盛んです。またグループ毎の集まりや旅行、個人的な趣味活動等、時には羨ましいと感じてしまいます。みなさんの大好きな園芸によって、各部屋のバルコニーも南庭園も、雑木林東側の空地もすべて花、花、花です。

地域交流も定着、みぎわ園ラウンジへのボランティア、みぎわ園園生との暖かい交わり等、お一人お一人のQOLの充実を見せられます。私にはとてもうれしいです。

この二万㎡そここのみぎわ会の地が特養、軽費、デイセンター、診療所、また教会と、一体的に流れている現在です。更にもっと異なるニーズにも応えられる福祉エリアへと形成してゆき、老いた方々にとって文字通り「憩いの汀」になれるように、それが私たちに与えられている夢でございます。

「D棟」のこと

美しい初夏の大空に、緑が少し重くなってきた六月です。読者のみなさまのご健康を祈りつつお便りいたします。

みぎわ園の大規模修繕と増改築工事が、現実性を持って近づいてまいりました。創立以来二六年来に及び、今や堂々たる老朽施設であるみぎわ園のこの度の大工事には、大別して三つの目的があります。

その一は、居室の問題です。六人室——雑居室主体で一室もあるのがみぎわ園の歴史を物語るのですが、収容の場から生活の場へという、施設への意識改革に伴い、プライバシー尊重、居住の快適さが求められ、現在では一室四名がリミットです。定員の三〇％は個室にとまで言われています。改造工事では困難ながらこれに近づけようとしています。

その二は、対痴呆の問題です。高齢化社会の重い問題として痴呆性老人の増加があります。僅か十数年間で大問題になりました。みぎわ園にも五〇％近い痴呆性の方の入所があります。建築構造面で受け入れ体制のない私たちは、入所の方と共に悪戦苦闘の日々が続いています。この度の改造にもこの点を重視しましたが、いろいろの限界があり、決してこれという決まり手には及

んでいませんが、何とか快適、安全、自由を共有出来る生活ゾーンの設定にと、衆知を尽くした設計となりました。

その三は、サービス提供側の問題です。寮母詰所、看護婦詰所は共に、定員九〇名時代のまま現在に至りました。鉄筋建築なので、ポンとパンクしない代わりに、働く人たちは正にぎりぎりの努力で悪条件に耐え、サービスの量と質の向上に励んでまいりました。この両センターに十分な機能性を与え、一層ゆたかなサービスを生み出してゆきたいと期待しています。

工事は北棟と東棟北端の一部を撤去し、新しい二階建一棟が建ちます。上下で四人室七、二人室一のほか、霊安室も広く設置されます。二階は三号館、四号館と開通するようになります。この「D棟」の完成で、漸く平成三、四年レベルの近代化に達することになるでしょう。

工事が中央の指示で平成六、七年の二年度に亘ることになり、もう一つ新しい問題「X」が浮上してきました。北側の一端にある素朴な浴室「イサクの湯」が、今秋あたりより消えてしまうことです。D棟には、一日中自由に利用出来る浴室が組み込んでありますが、少なくとも一七、八ヶ月の工事期間中は、自由に自力入浴を楽しんだ方たちから、それを奪い去ることになります。私たちにもとても辛いことで、悩みました。

南庭園に独立した浴室棟を造ろう、という一案が浮かびました。みぎわ園の独力入浴の方、ナオミ館、いずみ寮の方たちも、お風呂好きのみなさんに、ムードある、いつでも入れる浴場を造

りたい。そうすれば、あのお風呂へゆきたいからしっかり立とう、歩こうとされる方も現れるのではないでしょうか。

お湯に浸かりながら空が見える、花も見える、ゆっくり、のんびり、毎日温泉通いもいいもんだナと、頭に手拭を置いて話し合ったり、時には自慢の喉も……という景色にならないかしら……。私の心の中は、もうホカホカ湯気が立ってしまっているのです。

国、県の「設計変更はNO!」という冷たい水が落ちないことを祈るばかりです。

梅雨雑感

大変暑くなりました。湿度の高い梅雨期です。ご健康を祈りつつお便りいたします。

天気予報

地球という、絶対的に偉大であり無限に未知の生命体から作り出される気象の動きを、精細、広範に捕らえる方法や、それを深く分析するハイテクの発達により、最近の天気予報は驚くばかりよく当たるようになりました。しかもこの予報が絶えず微調整されながら、くり返しTVやラジオで報道されます。大変便利ですし、いろいろな計画も立てやすいことですが、未知の明日に向かう期待と不安の緊張の一部が、既定の事実になっていることが、時には淋しく、明日のすべてが未知である方が楽しいのではと、おかしなことを考える時もあります。

政治の世界

この程、私たちは政治の大きな混乱の下に相当長い間暮らしてまいりました。経験や洞察の中で組み立てられる計画や期待も、なかなか当たらないものなんだなあと思わせられます。マスコミの報道だけで知ることですから、事実はほんの僅かししか知らされないのでしょう。網の目のように複雑な謀略、術策が乱れ合う中でたたかうことは楽しいゲームなのかも——と、おかしなこ

とを考えてしまったりする時もあります。

みぎわ会の道

そんな今日（六月二十九日）、心せわしい朝の時間に、政治評論家の話がラジオから流れてきました。「権力とは使命を果たす責任である」という声に、ハッと手を止めました。今までもこういうことをよく聞いたと思うのですが、今朝は何故か大変新鮮に感じました。

みぎわ会の歴史にも、思いや考えを尽くした事々の予想外れ、期待外れの混乱のくり返しがありました。また、思いがけない疑心暗鬼の渦の中に引き込まれてしまう情けない体験の中を、誰もが通って来たものです。その都度現象の分析、原因の探求、洞察、推理にのめり込んでしまうこともありました。いつもこういう混乱からふと我にかえり、「老人ホーム」の使命と責任という道に、目と心を留めて立ちますと、覆われていた眼からウロコが落ち、しっかりわが道を踏み行く力が与えられることも、また共通の体験ではないかと思えます。

誰もがそういう体験をくり返しながら——苦しみうめきながら、自分とたたかいながら、今日のみぎわ会が創り出されてきたはずだと思えました。これはおかしな考えではないと思います。

今朝は激しい雨と雷鳴が続いていましたが、私が出勤する時には雨も止み、雲の切れ間に青空が見えていました。軽い足取りになりました。

暑中お見舞申し上げます

猛暑の中に七月が終わりました。各地のシビアな渇水の報せを聞きます。一雨欲しいと心から願われます。みなさまはいかがお過ごしですか。ご健康を祈りつつ、八月号を送らせていただきます。

この一ヶ月、みぎわ園、いずみ寮の二〇〇名近いみなさんは、幸い概ね平穩に過ごしてこられました。暑気熱、脱水症が例年のように弱い方々には散発しましたが、大事には至らず乗り切る事が出来ました。

こういう時、入所のみなさんと、サービス提供側の私たちの呼吸がぴったり合っていて、異常な暑さの中でも、いつもと変わりなく落ち着いて明るい朝夕を送れることのありがたさを強く感じます。長い間に培われてきた信じ合える心安さと、臨機応変に対応出来るサービスの質と量が、見えないけれど大きな力になっているのだと思います。

今月は「ノーマリゼーション」ということばを考えてみました。一つのことばには深い思想の根源があるのだと思いますが、近頃の体験を一寸ご報告いたします。

その一

ナオミ館の雑木君が「先生、いいものを見せてあげましょう」と、声を掛けてくれました。一寸不安も混じった気持ちで後についてゆきました。

なんと、ナオミ館玄関横の松の枝に、小鳥が巣作りをしているではありませんか。丁度親鳥が巣に帰って、大きく口を開いている雛たちに捕ってきた餌を次々と口移しで与えているところでした。ほんとにいいものでした。このナマの姿は感動的でした。息を殺して事務所の窓越しに眺めていました。

人々が生活しているところにある庭木、その庭木に小鳥（ヒヨだそうです）たちもまた安心して生活している、子育てをしている、それが私たちの住んでいる場所なのです。

これをノーマリゼーションと言うのは飛躍的な考え方でしょうか。本当に自然な当たり前のことなのだけど余りどこでも見られない、ノーマルなことだと思い、とてもうれしかったのです。

その二

みぎわ園のラウンジ、これは長い間の願望でした。昭和五三年、三号館を建てた時にその二階にはじめて開いた交わりの場、喫茶室です。楽しい歴史を積み重ねてきました。ルデヤ館開設に伴い、昨年四月よりその三階に移りました。部屋も広くなりました。メニューや器類もいろいろ工夫されています。ラウンジ日誌を開くのは毎朝の楽しみになっています。いずみ寮の方はお客

様にもなるし、またボランティアとしても参加して下さっています。ナオミ館のみなさんの利用も盛んです。

ここでは、入所のみなさんが誰でもいくつかのメニューの中から自分で選んで注文し、お客様としてコーヒー、たこやきなどいろいろを楽しくいただかれ、居室などでは聞けない思い出話の花も咲いたり、とてもくつろいだいくつもの姿を見せて下さるのです。ここでは自分で支払いをし、おつりを受け取ったり、時には誰彼のみやげにホットケーキを二枚包んで貰ったり……、誰にも、何処でもある普通の生活があります。施設の中にこういうノーマライゼーションを沢山つくってゆきたいと思うのですが。

猛暑ゆく

怖ろしいまでに暑い暑い八月でしたが、お元気にお過ごしになりましたでしょうか。私たちも幸い神様に守られ、この酷暑をほぼ乗り切れましたことを深く感謝しています。両施設では弱い方たちの発熱、食欲不振が頻発しました。誰も彼もが、力と知恵を尽くす日々ともなりました。そうした中でのトピックスをお知らせいたします。

夏まつり

八月十八日は恒例の「夏まつり」です。早くから周到な準備がすすめられていました。当日も朝からガラガラと暑い空でしたけれど、三八℃をものともしないつわものどもが沢山います。熱い意気と流れる汗の中で、広い駐車場には提灯も吊られ、西脇太鼓の舞台も出来上がりました。内ではみぎわ会オリジナルのバーベキューコンロに炭火が赤く燃え、やきとりの串、トウモロコシ、ビール、西瓜、おにぎり、おだんご、水まんじゅう等、あれもこれも山盛りのワゴン車が、何台も並びました。その頃、空が少し曇ってきました。みるみる黒雲が拡がり、雷鳴と共に四〇日ぶりの黄金の大夕立が沛然と降りはじめたのは、そろそろみなさんの車椅子大移動をはじめようとする五時前です。急遽屋内の夏まつりへ変更されました。

長い廊下の片側に、一〇〇台近い車椅子がずらりと並びました。色とりどりの浴衣姿の職員に、いつもながらみなさんの表情が変わってきています。私の開会の挨拶は「みなさん、こんばんはー」ではじまりました。どっと湧き上がる拍手に、私はうれしくてうれしくて「みなさん、雨喜（アマヨロコビ）だっせえー」と浮かれてしまいました。

盛んな楽しい夏まつりになりました。次々と流れる音頭に踊りの流れは止まりません。その間にも、園生のみなさんにはごちそうが次々と配られてゆきます。夕食が終わったばかりですが、旺盛な食欲です。いつも全介助のKさんの手が、ゆっくりおだんごを握っているじゃありませんか。誤嚥もなく、心配した夜も何事もなかったと……。

一粒万金の慈雨の下で、みぎわ園の夏まつりはキラキラ輝きました。

ハプニング

二四日、朝礼を終えた直後です。『松尾医院』と書いたスリッパをはいたおばあさんが、うちの前で倒れとられるよ」との電話。「ええっ!」みんなの顔色が変わりました。目の色が変わります。すぐ車が出ました。誰? 誰? と走りまわる中から、Kさんよ、Kさんよ、いやOさんもない! Sさんは? との声が飛び交います。Sさんは大丈夫! Oさん居られます! ああよかった。間もなく帰ってきた車の中に、Kさんがぐったり横になっています。Kさん、Kさん、と呼びながら車椅子へ、幸い怪我もなく無事です。毎日毎日、包んだり解いたりされていた二つ

の重い荷物も、一緒に帰ってきました。こんな重い荷物を両手に、一キロ近くも暑い日の下、車の多い道を必死に歩いて行ったKさんの姿を思うと、涙が流れる想いでした。

「Kさん、暑くてしんどかったですよ、けがしなくてよかったわね」C・D用の部屋で休んでいるKさんの横に座りました。仲よしのSさんが「私の責任やわぁ」と、まじめに心配して下さいます。「みなさんにアイスクリーム、ネ」と私。すぐナースが走り、大きなアイスクリームのカップ四個が届きました。「さ、アイスクリームよ、いただいて元氣出しましょうネ」それぞれにカップが渡されました。ナースはKさんの口に、励ましながらクリームの匙を運んでいます。

「Sさん、あなたもどうぞ」「いえ、先生どうぞ」「いいのよ私は」「いえ、先生どうぞ」「……」「……」「そうお、ありがとう、じゃ半分ずつしましょう」

私はカップから大きく一匙すくいましたが、もうクリームは溶けはじめ、ベトベト手に腕に流れてきます。「あっ何か拭くもの!」私の声にSさんが、自分の引出しから白い紙を出して下さいます。どんどん、どんどん長く白い紙! トイレットペーパーです! A・DのSさんもまた、いくつかのロールをしまっていたのです。思わずナースと視線が合いました。ポロポロとこぼれてしまう白い紙で、ネバネバの手を拭きながら、私はまたしても涙のにじむ気持ちでした。と、「あっ、ダメダメ」とナースの声に見れば、小柄なCさん(A・D)が自分のカップを平らげ、まだぼんやりしているOさんのカップをせっせと食べはじめていました。

いつも忙しく、楽しく、時に哀しいみぎわ園ですが、そこここに小さな秋が生まれています。

※ C・DⅡ脳血管性痴呆

A・DⅡアルツハイマー性痴呆

敬老月間

九月前半はまだ猛々しい残暑にさらされましたが、さすが彼岸の声と共に秋が訪れてまいりました。一九日には、珍しく雲の流れの合間から中秋の名月を仰ぐことが出来ました。

みなさまはお元気にお過ごしでしょうか。「敬老の月」と定められた九月中の、みぎわ会行事などをお報せいたします。

●感謝の集い 一五日午前一〇時より、講堂にて

年間を通じ、ラウンジ、売店、食堂の片づけ、各種タオルたたみ、洗濯物たたみなど、いろいろの持場を持って励んで下さった方々への、恒例の感謝の集いを行いました。みぎわ園、いずみ寮で計四二名の方々です。こういうカードを送り、売店、ラウンジ共通の買い物券一五枚をプレゼントといたしました。

「みなさま、今年もまた、いろいろお元気でお手伝い下さってありがとうございました。沢山のことがありますが、みなさまの毎日のそれぞれのお手伝いは、お仕事そのものも本当にうれいのですが、『私は〇〇〇が出来る、役に立っている』というみなさまのよろこびを重ねて感謝いたしました……」挨拶をしながら、私には、失明のFさんが山のようなおしぼりタオルを

感謝

〇〇〇〇様

あなたは毎日ホームの中で、
心をこめて、それぞれに楽しく
お手伝いして下さいました。私
たちはそのことを大変うれしく
又、心より感謝しております。

これからもういよいよお身体が
守られ、支えられて、喜びと安
心一ぱいの生活でありますよう
に、お祈りいたします。

かしほ(り)ににみ

平成6年9月15日

社会福祉法人 みぎわ会

理事 松尾 周



丁寧に伸ばして重ねている姿、廊下の手摺りを5m位毎日拭いて下さる盲目のTさん、Oさんのお祈りの声、園旗を揚げようか止めようかと、腰を伸ばして雲ゆきをじっと見上げるSさんの顔、それぞれ場所を決め、仲よくおしぼり巻きをして下さる方々、等々が臉の裏にきらめいてきて、ついことばが途切れるのでした。寮母の中西からもつづいて、活き活き暖かいお礼と励ましの挨拶がありました。

毎年九月一五日、ここで新しくほのとしたものが、私たちの間に交い合うのです。

●米寿・卒寿の祝膳

一五日午前一一時半より、ダイルームにて

今年の卒寿は三名、米寿五名でした。ご家族の参加が三名です。白いクロスにテーブルフラワーが美しくセットされ、ロの字の席の中央に大盛花、献立は鯛の活造り、心を込めた松花堂弁当、紅白の上用と果物のデザートです。ワインの乾杯からはじまりました。

いずみ寮のT氏、米寿を祝され、いたく感動、何としてもあと二年がんばって卒寿まで、この意気に拍手。

●D棟 歩みだす

一九日 入札会 (株)松岡組の落札となる

二二日 起工式 午前一〇時より 南庭園にて

西脇市福祉課長、法人役員、入所者、職員等多数の参加者の祝福と期待の中で、山根牧師司式により厳粛に行なわれました。一八ヶ月に亘る工事の無事を祈ること切であります。

●米国研修

九月三日より一日まで、「米国社会福祉経営セミナー」に、丸山と共に参加しました。アトランタ市、マイアミ市の両市で、ハードスケジュールの研修旅行でした。

漸く旅の疲れ、時差呆けから解放されてきました。わが国でもはげしく移り変わる高齢者福祉の中で、学んできたことなどゆっくりかみしめ、みぎわ会の選択する道を探求してゆきたいと考えています。学びの秋、一〇月です。

稔りの秋

秋が深まってまいりました。この辺りにも、微かに日一日紅葉してゆく天然の業を見せられています。みなさまが快い朝夕をお過ごしのように祈りつつ、お便りをいたします。

昭和四四年五月、長い経緯の上でやっと五〇床の「みぎわ園」が誕生いたしました。その正門のテープカットの式で、当時みぎわ教会の牧師であられた長谷川寿一先生が、「ここが天国の門になるように」と祝福して下さいました。

以来二五年余、六〇〇余名の方々が、みぎわ園から天国へ旅立ってゆかれました。

私たちは、そのお一人お一人の長い人生のラストステージではじめてお出逢いし、施設ケアという形の中で何十年、何年、または僅か数ヶ月のお交わりを重ねた上、終末の看取りをし、新しい旅立ちをお送りしてまいりました。寮母として、ナースとして、医師として、またそれぞれの職務の上で、誰もが心を尽くしてとりくんでまいりました。去りゆかれるみなさまの越し方を知ることとは殆どなく、またこちら側からたずねてゆくこともいたしません。ただ、みなさまが残されたライフ・スタイルの印象から、なんとなく「一人の人の運命」を想わせられるばかりです。

今年はこの三ヶ月余に、九三歳、九八歳、九三歳と、それぞれ長寿を生き抜かれた、そして共

にキリスト信仰を守られた、三人の女性を相次いでお送りいたしました。

ご自分の過去を固く閉ざし、お元気な間は一生懸命園内の細々したことを黙々と手伝って下さったKさんは、二一年余の在園でした。ただ、亡きあとのご遺骨についてのみ、私にしかと托して下さいました。

殆ど声に出ることばの少ないFさんは、ただ静かなほほえみでYes、Noを表す方でした。病気の苦痛の訴えも少なく、ただ静かに去ってゆかれました。九三歳です。昇天二週前の礼拝にも出席されたのです。

Yさんも九三歳、いつも美しく装い、自分らしい気品を漂わせている方でした。母教会への熱い想いで、不自由な足でよく神戸にもいらっしゃいました。発病後（脳梗塞）は、どんなことにも「ありがとう、ありがとう、感謝です」と落ち着いたほほえみを見せられ、「天国への特急券がほしい」とユーモアを交えて私に仰ったのですが、本当に神様から特急券をいただきました。急変した病床で「主よ おわりまで 仕えまっらん……」と賛美を残して下さいました。

それぞれ波乱に満ちた長編の「女の一生」を残されているのでしょうか。みなさまが、今は真の平安とよろこびの中で、聖書に約束されたように、神様にその眼の涙を拭かれていらっしゃる私たちには信じています。

静かな稔りの秋です。

天使たち

十二月です。寒くなりました。今年も過ぎてゆきます。十二月と言えば、街々には例年のように大きなクリスマスツリーが立ち、イルミネーションが輝き、賑やかなクリスマスシーズンが演出されてまいります。

聖書によれば、本当のクリスマスは、まず荒野で夜も眠らず羊を守っていた羊飼いたちに、天使たちの歌と共に知らされたと、尊く美しい情景が記されています。今月は、天使と私のことをお聞き下さい。

前月号でご存じだと思いますが、今年の秋で私は八〇歳になりました。七〇歳から八〇歳までの一〇年間は公私ともに、大変むづかしい問題や、辛いこと、哀しいことが、後から後へ大波のように打ち寄せる時でありました。けれどもみぎわ会はその中で、少しずつ新しく、また大きくなり、施設としての力も加えられてまいりました。祈って待つよりほかなかったお金も、勝れた働き人も、必要なだけは与えられてまいりました。

多分人たちには、苦しみに打ち伏せられた私のうめき声も涙も洩れず、いつもちっとも苦しんでいない人のように見られてきたのでは、と思います。すごいことだと、自分の内深く思います。

近頃、この一〇年をふり返りみて、「主の天使たち、主をおそるる者のまわりに宮を連ねてこれを助く」という、古い聖書のことばをしきりに思い出させられていました。

天使と言え、泰西名画によく見る愛らしく清らかなエンゼルを思い浮かべます。私はこうした天使たちが、目には見えないけれど輝く翼を連ねて、私を敵の手から守って下さったことを思いました。詩篇三四篇に「主の使は、主をおそれる者のまわりに陣をしいて彼らを助けられる」という一節を探し出した時は、よろこびに溢れました。

一〇月半ば、私の傘寿を祝って数名の方が夕食会を催して下さいました。長い年月、私と共によろこび、共に苦しんで下さった代表的な人たちです。とてもうれしい一夜でした。が、このお招きを受けた時、やっと私の目が開かれたのです。

みぎわ会と私が今日まで生かされてくる間も、次から次へ私に攻めかかる苦難の中でも、私を守って下さった天使たちは、ここに居るこの人たちではないか！ そうしますと、みぎわ園、いずみ寮を、そして私をとりかこんで守って下さる天使の大陣営が見えてきました。みんな神からつかわされた天使の大群です。

これが、八〇歳の長寿と共に神様からいただいた、今年最大のプレゼントでございます。みなさまをとりかこむ天使たちを見出し下さるよう祈ります。

幸せな年をお迎え下さいますように。

あとがき

ずっしりと重い二〇年分の「みぎわだより」が号順に六冊に分冊して保存されていました。読み返しはじめると、手書き・手作りの誌面には、みぎわ園の歴史がまだ暖かい肌触りで生きていました。記されている一つ一つのこと、一人一人のこと、どれもこれも石に刻んでおきたいと思うほど、私には大事なことに思えます。

平成六年春には施設長を退き、傘寿の秋になっていました。膨大な「みぎわ会だより」の中から何をどうまとめればいいのかわかりませんまま、日が過ぎました。

明けて平成七年一月一七日、阪神大震災が起きました。私自身も施設も何一つ被害は受けていませんが、大事な大好きな神戸が一瞬に崩れ去り灰になった事実はショックというほかありません。哀しさと空しさに呆然と数日を過ごしていた二三日の朝、JR福知山線開通のニュースに駆け立てられる思いで筒井書房さんに連絡し、翌二四日粉雪の散る丹波の小さな駅に筒井さんを迎えました。氏の助言によりとりあえず「総合だより」の巻頭言のみを収録することになりました。小さなこの本はいわば重い長い「便り誌」の表紙に過ぎませんが、それでも大勢の方に読んでいただければうれしいと思います。

みぎわ会 25年の歩み

1994年（H 6）10月

- 1968年（S 43）12月 社会福祉法人 みぎわ会設立
- 1969年（S 44）5月 特別養護老人ホーム みぎわ園開設（定員50名 県下民間特養第1号）
- 1972年（S 47） 増築、定員90名に、6人室×5＋4人室×5（8人室解消）
- 1975年（S 50） みぎわ園診療所開設（松尾医院閉鎖）
- 1978年（S 53） 3号館増築、定員100名に（痴呆性老人対策として）
2Fにラウンジ（喫茶室）整備 団欒交流の場に
- 1978年（S 53） ショートステイ制度発足 県下第1号の指定を受ける
- 1981年（S 56） 軽費老人ホーム いずみ寮併設 定員50名
- 1983年（S 58） 定員110名に（老健法発令を機に）
- 1984年（S 59） 県の指定により、重度痴呆性老人ショートステイ棟として
4号館増築、定員4名
- 1985年（S 60） 地域交流等多目的室として5号館増築（現ボイラー室）
- 1988年（S 63）2月 西脇市の委託を受けデイサービス（B型）事業開始
ナオミ館として市民多数に利用されている
- 1989年（H 1） 新館増築、定員130名に 4人室×5
2F 診療所新設（元診療所は洗濯室に改修）
- 1992年（H 4） ルデヤ館増築 国の寝たきりゼロ対策による拡張事業
1F 食堂 100名の利用が可能
2F ショートステイ16名（個室×5、4人室×2、3人室×1）計20名に
3F デイルーム ベッドを離れての生活のために
- 1993年（H 5） 厨房改築（大規模修繕） 280食可能に（地域配食に備え）
- 1994年（H 6） 6人室解消、痴呆性老人エリア整備、個室増室、フルタイム
浴室、霊安室、寮母、看護婦詰所、ゲストルーム（研修生受入等）整備等に着手
- 1996年（H 8）3月 上記事業完成予定
完成像 4人室×27 3人室×5 2人室×4 個室×19
（計150名 うちショート20名 及び痴呆ゾーン16名）

わたしの小さなたより

1995年3月3日 初版

著者 —— 松尾 周子

発行 —— 筒井 書房

〒176 東京都練馬区豊玉中2-19-14

TEL 03 (3993) 5545

FAX 03 (3993) 7177

ISBN4-88720-141-9 C3036 P980E

ISBN4-88720-141-9 C3036 P980E

定価**980**円(本体951円)

